

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



租界班 第43回研究会 (2014年度 非文字資料研究センター 第1回公開研究会)	
近代中国における日本人経営の新聞の研究	2
租界班 第44回研究会 (2014年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会)	
国際シンポジウム 中日関係と広州近現代史研究	8
2014年度 非文字資料研究センター/沖縄県立博物館・美術館主催 第3回公開研究会	
『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界	12
研究会報告	
『海外神社跡地のその後』研究会	
日本統治時代の台湾に於ける酒販売と構内神社	金子展也 18
第45回 『中国・朝鮮の旧日本租界』研究会	
中国・朝鮮の旧日本租界	田島奈都子・陳雲蓮 22
第7回外国人居留地研究会2014全国大会 横浜大会 開国160周年	
日本近代化の扉を開く	大里浩秋・内田青蔵・孫安石・青木祐介 24
寄贈図書 月刊『高雄日僑会誌』について	近藤恒弘 29

研究調査報告

海外神社跡地のその後	
韓国済州島の海外神社跡地調査報告	渡邊奈津子 30
海外神社跡地のその後	
中国・華北 (北京、天津、済南、煙台、青島) の神社跡地	稲宮康人 32

研究エッセイ

生活の歴史を読み取る史料としての「家事教科書」	須崎文代 36
-------------------------------	---------

連載 戦時下メディア研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語—「用語編」その1	原田 広 38
--------------------------------------	---------

■主な研究活動	47
■Information	48

租界班 第 43 回研究会 (2014 年度 非文字資料研究センター 第 1 回公開研究会)

近代中国における日本人経営の新聞の研究

日時：2014 年 6 月 21 日（土）13:00 ～ 17:30
会場：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 804 室

開会挨拶：内田青蔵（非文字資料研究センター長）

趣旨説明：孫安石（非文字資料研究センター 研究員）

報告：『上海新報と修文書館について』板倉雅宣（タイポグラフィ学会）
『上海新報と日本人コミュニティ』高綱博文（日本大学）
『上海新報と日本の外務省』孫安石（神奈川大学）
『泰東日報（大連）—都市空間からの対日本言説—』橋本雄一（東京外国語大学）
『順天時報（北京）とその社説について』青山治世（亜細亜大学）

コメンテーター：

大里浩秋（神奈川大学）、関智英（明治大学）、周武（上海社会科学院歴史研究所）※書面による参加

上海新報と修文書館について

板倉 雅宣

修文書館は 1883 年に東京築地活版製造所の指示で、長崎活版所の松野直之助・平三郎兄弟が中国上海で開設した。活字・印刷機の販路拡大のためのものである。

わが国の活字鑄造は 1869 年上海の美華書館館長ウィリアム・ギャンブル（William Gamble 1830-86）を長崎造船所に招聘し、本木昌造らが活字鑄造技術を学んだのが最初であった。本木昌造は長崎に新町活版所、大阪に大阪活版製造所、京都に點林堂、横浜に横浜活版社、東京に築地活版製造所等の支店を次々に設け、活字を初め印刷機械までを広く販売する会社になっていた。

1871 年、「新貨条例」が制定され「両」から「円」という名称に変わった。1874 年、長崎の第十八銀行は、上海総領事品川忠道の進言で新貨・円銀交換設立を決め、松田源五郎・陽其二を上海に派遣した。松田源五郎は後に東京築地活版製造所の取締役を務めた人である。陽其二は横浜活版社で最初の日刊紙「横浜毎日新聞」を発行した人で、上海の市場調査をして帰国した。1879 年には平野富二は明朝体の種字の改良のため

田成を上海に派遣するなど、上海への関心は高かった。翌年春、岡正康を上海に派遣し、1882 年 7 月、上海商同会を結成し、三井物産会社内に事務所を置いて、月刊機関誌『上海商業雑報』を発行する。岡正康は、すでに 1879 年に上海在住のわが国の商人の会結成に関し上海総領事館の公認を得ていた。会の目的は次の通りであった。

「上海商同会総則」

「目的之事 商業上ノ公益ヲ商量之チ實際ニ経営スル事

経営スヘキ事業之事 上海及ヒ当方各地ノ商況ヲ探偵シ之ヲ会員ノ便覧ニ供スル事 広ク内外各地ノ物産見本ヲ聚メ之ヲ縦覧ニ供スル事 内外各地ト商業上ノ通信ヲ開ク事 有益ナル書類ハ刊行シテ之ヲ世上ニ広ムル事」等。

こうして上海の市況を調査した結果、上海に活字や印刷機の需要があると判断して、東京築地活版製造所は 1883 年 3 月、



上海に「修文書館」を開設し、松野直之助・平三郎、速水英喜を派遣した。1884 年 9 月の上海の新聞『申報』に「修文書館」開設広告を掲載した。

2012 年、長崎の宮田和夫氏から長崎歴史文化博物館に上海修文書館書翰集 13 冊が所蔵されていることを知らされた。中村慶子寄贈品で中村重嘉旧蔵のものである。

- | | |
|---------------------------|------|
| 01)「明治十四年 印刷見積書」 | 1881 |
| 02)「明治十七年 東京本社来状」 | 1884 |
| 03)「明治十八年 書翰及雑録綴」 | 1885 |
| 04)「三井物産会社 大阪活版製造所 往復文書」 | 1885 |
| 05)「明治十八年 印刷物誓約書」 | 1885 |
| 06)「明治二十年以降 雑録綴」 | 1887 |
| 07)「書翰集」 | 1887 |
| 08)「長崎新町活版所 往復文書」 | 1887 |
| 09)「明治二十年以降 築地活版製造所 往復文書」 | 1887 |

- | | |
|---------------------------------|------|
| 10)「自明治二十一年一月 至明治二十二年十二月 大阪出信控」 | 1888 |
| 11)「書翰集」 | 1888 |
| 12)「明治二十一年以降 大阪活版製造所 往復文書」 | 1888 |

13)「明治二十三年 賄料計算書」 1890
この中の東京本社というのは築地活版製造所のこと。修文書館の印刷受注の主なもの、大美国聖經(教会 亜米利加教会からの聖書類であった。大量に受注したのは、中国、清朝に関する編年体の歴史書で康熙朝、乾隆朝、道光朝などである。清王先謙撰『東華録』194 卷、『東華統録』230 卷、上海の廣百宗齋から出版された膨大な歴史書である。

築地活版製造所や大阪活版製造所で活字を組んで紙型にとって鉛版にして修文書館に送って印刷した。当時は鉛版製造設備は中国には無かったものと思われる。

同様に、汪輝祖『史姓韻編』64 卷 耕餘樓書局（東洋大学附属図書館所蔵）も受注している。

1889 年には、築地活版製造所は外務省に中国各地の幅広い都市での活字・出版等の調査を依頼し回答を得ている。

翌年 6 月、修文書館の松野平三郎は週刊邦字新聞(A4 判)『上海新報』を発行する。1 月 27 日、上海新報発行之趣意を『朝野新聞』『東京朝日新聞』の中で外交・

通商の隆盛に対して「尤モ必要トスルハ清国ノ事情ナリトス」「清国ハ実ニ我国ニ執リテハ最モ密接ノ関係ヲ有スルガ故ナリ」「清国全土ノ事情ヲ詳載スル一大新聞ヲ発行シテ国民福ヲ謀ル」ことを目指すことを述べている。『上海新報』は 1891 年 5 月、52 号で廃刊となるが、活字製造販売・諸印刷物の請負は継続していった。廃刊になった原因は 52 号「休刊の辞」によれば「紙数増進せず」「土地代高騰による家税」に耐えられなくなったことをあげている。

1897 年、商務印書館 The Commercial Press Book Depot が創業した。1900 年になると、修文書館の設備一切の売却がなされ、商務印書館にその設備が移転した。その結果、中国の活版印刷の品質は著しく向上していくことになる。



板倉 雅宣氏

『上海新報』と日本人コミュニティ

高綱 博文

『上海新報』は戦前から明治期の日中貿易や上海日本人居留民史等の貴重な史料として知られているが、本報告は 1890 年 6 月 5 日に創刊され、翌年 5 月 29 日に第 52 号で廃刊となった日本語新聞『上海新報』の内容を紹介することを主要な課題としている。その課題を筆者の研究テーマであるところの上海日本人居留民社会史研究の一史料として『上海新報』を歴史的に検証し、また読み解くことによって行うものである。

上海の日本人居留民社会の変化は、基本的に近代日中関係史に規定されていた。その日本人居留民社会の歴史を大きく分けると、1871 年の日清修好条規の締結から 1895 年の日清戦争終了に至るまでの〈前史〉、日清戦争から 1937 年の第二次上海事変に至るまでの〈発展期〉、第二次上海事変から 1945 年の日本の敗戦に至るまでの日本軍の〈占領期〉、そして敗戦から日本人居留民の引揚げまでの 4 期に区分できる。上海日本人居留民社会〈前史〉については、現在に至るも戦前における米澤秀夫や沖田一の研究、または史料的にも池田桃川『上海百話』や『上海居留民団三十五周年記念誌』などに依拠するものであり、体系的な研究はほとんどなされていない。



『上海新報』は、日清戦争以前の上海における日本人が発刊した出版物としてその代表的なものである。それ以前には1882（明治15）年7月に創刊され、1883年10月の第11号で廃刊になった『上海商業雑報』がある。

『上海新報』も『上海商業雑報』と同様に三井物産（三井洋行）の後援を得て発刊されたもので、その創刊目的も「日清間の通商貿易を奨励誘導する」ことであった。その創刊の辞で次のようにいう。「支那全国ノ人情風俗商業ノ慣習状況其他万般ノ出来事ハ勿論苟モ通商貿易ニ関スル事項ハ論説ニ雑報ニ細大洩サズ記述シテ我日本ノ内地同胞ニ報道シテ……日支間ノ通商貿易ヲ企画スル者ノ方針ヲ指定シ……日本ヲシテ富強ノ域ニ達セシメント欲ス目的」なり。中国一特に上海の商況・貿易情報、論説、小説、広告などを掲載しており、上海及び中国の事情を日本人居留民に伝えるとともに、通商貿易の発展を阻害していると考えられる問題を厳しく批判しており、沖田一の「在滬邦人の木鐸たらしめる点に重点が置かれて居つた」との指摘は極めて適切であろう。

「日清間の通商貿易を奨励誘導する」ことを刊行目的とした『上海新報』は、上海における日本「居留商民」を主な購読者として想定していたと推察される。

『上海新報』が刊行された1890年当時の日本は、工業化が始動する時期であり「産業革命初期」とされている。この時期は、国際環境の変化にともなって中国商人の活動が活発化したことでも知られており、日本が日清貿易の商権を回復するためには彼らへの対応が最大の課題であった。

『上海新報』の論説は、1890年当時上海にいた日本人居留民の状況を、日本領事をトップとして、その保護管理下に商業貿易に従事する日本「居留商民」、さらに下に取締りの対象である日本「賤民」として捉えている。

当時の上海日本人コミュニティは、その中核になる

べき「居留商民」層の萌芽・形成期にあったと考えられる。上海日本人コミュニティの中核であった「居留商民」は、「からゆきさん」を「醜業婦」として差別化することによって「日本国民」としての自覚を持ち、ようやく自己のアイデンティティを獲得しつつあったと見られる。しかし、それは日清戦争後の上海日本人居留民の「帝国意識」からはほど遠いものである。

当時の上海における日本「居留商民」は、欧米商人や中国商人に圧倒されており、ポルトガル人こそが身近な競争相手として意識されていたことが論説から窺われる。上海における日本「居留商民」にとって自己認識とは、「国際都市」上海における弱者・周縁者としてのそれであり、いまだ圧倒的な存在である欧米人に対する強い対抗意識も商業上の優位者である中国人への蔑視意識もなく、欧米人に使役されるポルトガル人にコンプレックスを持ちながら彼らを競争相手として想定するようなものであった。

『上海新報』はその紙面を見れば主要な読者を上海に居住して貿易・商業に従事する日本人居留民一同紙の表現を使えば「居留商民」を想定していたことは明らかである。しかし、その購読者たる「居留商民」は人数的にもまた階層的にも十分に形成されておらず、1890年当時の上海日本人コミュニティは「日本式コミュニティの雛形」が誕生したばかりであった。

上海日本人コミュニティは、「からゆきさん」に経済的に依存する初期的な状況から日清貿易に依存しようとする転換期にあり、このような新たな社会的ニーズの応えるための一つの試みとして『上海新報』は発刊されたものといえよう。そして、『上海新報』は日清貿易を担うべき日本「居留商民」の覚醒を求めて彼らを鞭撻し、日清貿易の促進を阻害すると考えられる事柄については日本領事といえども厳しく批判するものであった。



高橋 博文氏

「上海新報と日本の外務省」の報告と雑感

孫 安石

当日の報告は神奈川大学非文字資料研究センター編『年報 非文字資料研究 第10号』（2014年3月）に

掲載した論文「清末上海の日本語新聞『上海新報』（1890年～1891年）の世界一活版印刷と三井物産、そしてメディア史の観点から」の内容の中から日本の外務省外交史料館の資料に焦点を当てて紹介したものであったので、ここでは重複を避けるため結論で述べたメディア史という観点から接近するときに得られた成果の一つを紹介し、その他の雑感を一つ記すことにしたい。

19世紀の末に上海で刊行された日本語新聞『上海新報』をメディア史という観点から見たときに同紙に掲載された読者投稿欄と「支那各地通信」（朝鮮、台湾などを含む）の発信地点を結ぶ情報ネットワークがすでに日清戦争以前に構築されていたことは大いに注目されるべき点であろう。勿論、このような情報ネットワークが『上海新報』独自の力によって築かれたものでなく、三井物産や日本郵船などの各支店網が基礎になっていたことは言うまでもないが、東アジアを結ぶ商業ネットワークに加え、これらの商業情報がメディアのネットワークに掲載されたという意味は極めて大きいと思われる。

例えば、明治～昭和に至るまでアジア主義を代表する団体の一つとして活動した東亜同文会の機関誌『東亜時論』、『東亜同文会報告』など）に見える情報ネットワークとの関連性に注目したり、その他の中国で発行された各種の日本語新聞、雑誌に見える情報ネットワークとの関連性などを比較検討する作業を積み重ねれば、中国とアジアにおける日本の情報ネットワークがどのように形成、発展されていたのかを究明できるのではなかろうか。中国において欧米の宣教師が築いたネットワークがNorth China Heraldなどを始めとする英字新聞、雑誌の重要な情報源として機能していたことは周知のとおりであるが、日本側のこのような情報ネットワークに対しても、再解釈の必要があるか

もしれない。

もう一つ今回の報告で感じた雑感は、今後、明治から昭和時代にかけて中国各地（華北、華中、華南など）で発行された日本側の資本による各種新聞と雑誌の研究がさらに注目されるべきではないか、という問題意識を多くの研究者が共有していたことであった。今回の報告で紹介された『上海新報』、『順天時報』、『泰東日報』はいずれの地域においても日本人と中国人の交流、または対立を垣間見る恰好の所在であることは言うまでもない。東アジアの歴史認識問題が問われるいまだからこそ新聞メディアに関連する研究を深め、互いの理解を深めたい。



孫安石氏

1919年ごろの大連・中国語新聞『泰東日報』—都市空間からの対日本言説—

橋本 雄一

時間（多様な情報が生む時間差＝歴史）と空間（多様な情報が生む多様な現在）を同時に総合的に記録・表象する新聞メディア。それは情報どうし、情報の〈主〉どうしによる共存と衝突の場でもあろう。この新聞像こそ、東アジアの近代都市モデルそのものだ、という思いを強くする。そのような新聞空間を、日本側政治の場所「関東州」の大連で1908年創刊された中国語『泰東日報』紙の社説をもとに観察した。報告者はこれまでこの新聞にある言語・文学文化・対「日本」言説・商業広告欄を、とくに第一次世界大戦期以降について観察してきた。今回はなかでも、言論・編集の要人として活躍した傅立魚（1882-1945。辛亥革命前は日本

表1 上海新報の日本国内注文取扱所（『上海新報』創刊号より作成）

住 所	店名・人名
京都烏丸通三条北	點林堂活版所
熊本県熊本市新二丁目	長崎次郎
福岡県博多中島町	林斧助
藝州広島西横町	松村善助
山形県西田川郡鶴岡	活眼堂
東京京橋区築地二丁目拾参番地	上海新報東京支局
大坂北久太郎町（大阪活版製造所構内）	上海新報大阪支局
長崎市新町（新町活版所構内）	上海新報長崎支局

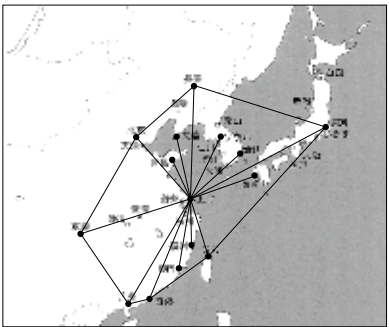


図1 『上海新報』の情報ネットワーク（「支那各地通信」の発信地点より孫安石作成）

に留学、革命参加後、袁世凱政權に迫られて大連に亡命。署名は多く「西河」を使用）による1919年前後の社説に焦点を当てた。

まず紹介したのは、社説に特徴的な対「日本」言説、すなわち遼東半島南端の日本側政治機関や日本人に対する言説である。日本側への連帯意識として、「満鉄首脳の交代」（19年4月。ここでは日本語に訳す。以下同じ）、「日本当局が禁制品を取り締まることへの感謝」（同4月）、「中日青年の提携」（同8月のコラム「巳未春秋」）。日本側との亀裂が観察できるものとして、「日本は中国への支那という呼称を変えるべき」（同3月）、「満鉄汽船の賃料改正の必要を論ず」（同4月）など。このうち大連にある日中双方の溝を指摘するものとして特に重要なのが、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の列車車両における対中国人乗客「差別待遇」問題を告発する社説である。「結局、差別待遇はあるのか」（20年5月）、「中国人も反省すべき」（同5月）、「ああ、中国苦力」（同7月）、記事「実地調査記」（同5月）、また傅立魚ではないが他の論者の記事として「大連の日本人に忠告する」（同5月。コラム「随感録」）など。

都市インフラをめぐる興味深い社説として、「大連の華人教育問題への希望」は連続5回（19年3月）に及び、当時コレラが東北地方を襲ったことから「東北三省は中日が共同して防疫に当たる必要あり」（同8月）、自分たち中国側についても「大連華人が病院を設立する必要を論ず」（同8月）など。「関東州」内の中国人居住地問題から「土地建物会社への希望」（同4月）、「大連土地家屋問題について—中日で差別があつてはならない—」（同6月）、また近郊農村の中国人農民の土地問題をめぐる日本側の姿勢を告発する社説（20年11月）も紹介した。

さらに都市外部のエリアへの目線が示されている社説「金州・旅順の繁栄策—関東都督府に大連居住民の救済を求める—」（18年12月）、「金州孔子廟の秋季祭に思う」（19年10月）にも言及。ロシア～日本によってクローズアップされていく植民都市大連よりも、遥かに長い中国史において主要都市だった場所、金州など近郊地への愛着も、『泰東日報』の中国語には込められている。

「関東州」は1925年以降日本側によって言論管理が厳しくなるが—これは日本帝国内の治安維持法の成立と時間的なアナロジーを持つ—、それ以前の時間と空

間における中国語新聞の真摯な言説、しかしまた植民地ゆえの注意深き工夫に満ちた言論（「中日親善」などの連帯言語も）、による飛翔と投げかけを垣間見た。

コメンテーターからは、この新聞の設立や運営等の背景説明がさらに必要、焦点をもう少し絞るべき、とのご意見を頂いた。今後の課題です。フロアのかたからは、『泰東日報』は現在どこで読むことができるか、植民地の空間で当時中国言論人はどこまで発言できたのか（これについては上述）、といった質問を頂いた。中国でマイクロフィルム化されたものが比較的接しやすく、大連市図書館や北京の中国国家図書館等で見られる、などの情報交換ができた。あとの懇親会では、新聞印刷の分野から報告なさった板倉雅宣さんとお話しでき、日本の近代印刷で漢字活字を決める元が『康熙字典』であったこと、印刷技術としての輪転機導入は日本では1910年前後に導入されたこと、を教えて頂いた。1920年11月のやはり傅立魚の社説は、『泰東日報』が輪転機を使用し始めたと報告している。東アジアの近代的印刷技術の移入の方角と時間差が、文字と情報が移動していく〈帝国⇄植民地〉地理空間とどう関係してくるのか、本報告者も刺激を受けた次第です。



橋本 雄一氏

『順天時報』（北京）とその社説について

青山 治世

『順天時報』（1901～30年）は、清朝末期から満洲事変前夜という、中国にとって最も変動の激しい時期に、政治の中心であった北京で継続的に発行されていた日本人経営の中国語新聞である。日本人が中国で30年にわたり発行し、多くの中国人読者を得たにもかかわらず、日本国内の研究者には、メディア史研究の対象としてはほとんど注目されてこなかった。

中国における新聞事業は、在華西洋人が開港場で発行した欧文紙に始まり、1870年代初頭に上海で創刊された『申報』などの中国語新聞も、当初は外国資本によるものだった。日本人も日清戦争以降、『同文滬報』（上海）などを中国各地で発刊したが、首都の北京では、清朝政府の意向もあり、長らく近代的な中国語新聞は

発行されなかった。その後、義和団事件を経て、清の朝廷が西安に避難している機会をとらえて、東亜同文会の中島真雄らが北京で最初の中国語日刊紙を創刊した。それが本報告で取り上げた『順天時報』である。

19世紀末から20世紀初頭にかけて中国に登場した日系中国語新聞は、日中両国の親善や提携を唱える日本の対外宣伝の手段であり、特に『順天時報』は、1905年に外務省（駐華公使館）の管轄下に入って以降、日本の対中政策と密接な関わりを持つようになった。その後、辛亥革命、袁世凱政權、段祺瑞や張作霖などの軍閥政權を経て、国民党による北伐が完了すると、同紙はその影響下に始まった排日運動のターゲットとなり、1930年3月にいたって、時の浜口内閣（幣原外相）の対中宥和策の一環として廃刊されることになった。

その間、読者対象となった中国人の同紙への眼差しも大きく変化した。清末から民国初期にかけては、諸改革の進展状況とも符合して、中国富強化のための重要な情報ソースとして見られる傾向が強かった。しかし、対華21カ条要求（1915年）、五四運動（1919年）を経て、中国における対日認識が悪化するに伴い、次第に「日本帝国主義の宣伝機関」として攻撃・打倒の対象と見なされるようになった。こうした変化は、同紙掲載の「論説・社説」の執筆陣の中心が、1910年代半ばを境に、中国人から日本人に移ったことと符合しているように思われる。

ただ、メディア史研究として、読者である「中国人」を均一的に捉えることは、もちろんできない。『順天時報』を敵視する言論が出現し、次第に大きくなったことは確かだが、すべての中国人の眼差しが「好意から反感へ」と変化した、という図式のみで捉えることは、同紙の歴史的な位置づけを極めて限定的なものにしてしまう恐れがある。

最後の主筆を務めた金崎賢^{かなさき けん}（在任1919～30年）は、日本や日中関係に関する同紙の記事・論説については、中国人読者は「手前味噌」もあろうと見ていたが、「その他に関しては公平であり、正確であり、広汎である」と評価していた、と後年書き残している（『順天時報廃刊当時の想ひ出』、『支那』第26巻第10号、1935年10月）。むろん、こうした日本側当事者の証言も相対化されるべきだが、中国語圏における同紙の研究では、日本側の史料や証言が参照されることはあまりなく、排日運動の影響を受けて廃刊にいたった「最期の

姿」を、30年にわたる同紙の歴史全体に投影する傾向が強いように思われる。

日本の中国へのアプローチの一形態としての「日系中国語新聞」と、中国の日本への眼差しを映し出す「中国ナショナリズム」との関係やその変化を見る上で、『順天時報』は恰好の素材（あるいは核心的存在）といえよう。日中ともに政治的な変動が激しかった時期に、30年にわたり発行され続けた同紙を研究するには、日中双方の関係史料を精査するのみならず、「最期」あるいは特定の一時期の言説やイメージによって全体を捉えることなく、それぞれの時期に即した理解が不可欠であることは言うまでもない。

そうした意識から、筆者らは2012年夏に同紙の勉強会を立ち上げ、各時期の多分野にわたる「論説・社説」の会読を中心に、同紙への理解を少しずつ深めている。その一方で、同紙の全期間にわたる「論説・社説総目録」の作成を進めており、その過程で、同紙掲載の「論説・社説」の形態や執筆陣の変遷についても把握できるようになった。上述した執筆陣が変化した時期の把握も、その成果の1つである。こうした「通史」的理解を手始めに、『順天時報』を通して、20世紀前半の中国近現代史や日中関係史を再考する新たな視座を探っていきたいと考えている。



青山 治世氏



関 智英氏



大里 浩秋氏



租界班 第 44 回研究会 (2014 年度 非文字資料研究センター 第 2 回公開研究会)

国際シンポジウム 中日関係と広州近現代史研究

日時：2014 年 6 月 28 日（土）9：20～18：00
会場：広東国際戦略研究院会議室
主催：広東国際戦略研究院東亜研究中心 / 広東外語外貿大学日本語学部 / 神奈川大学非文字資料研究センター

報告 1：広州のシンポジウムでの報告

大里 浩秋

6 月 26 日から 29 日、同僚 3 人と広州に出かけて、広東外語外貿大学（以下、広東外大と略す）で開かれたシンポジウム「中日関係と広州近現代史研究」に参加した。新白雲国際空港に降り立ってすぐに身に迫ってきた日本の真夏日とはおよそけた違いの暑さと、広東外大近くの果物屋で買って食べた旬の荔枝のおいしさに、広州に来たことを実感した。以下、この時のシンポジウムで報告された数人の報告内容と、私が話した内容を紹介するとともに、別の一日に市内観光をした際の印象のいくつかを記すことにしたい。

6 月 28 日に実施したシンポジウムは、広東外大の広東国際戦略研究院東亜研究中心と日本語学部、神奈川大学非文字資料研究センターの 3 者が共催したもので、報告は順に、

曹善玉（中山大学）「移民、留学と革命—20 世紀 20～30 年代の中山大学韓国人留学生研究」
 孫安石（神奈川大学）「広東省の来日留学生関連資料の紹介—1920 年代を中心に」
 趙曉靚（広東外大）「吉野作造と滿蒙權益論」
 朱琳（神奈川大学）「二つの中国認識—吉野作造と内藤湖南」
 濱下武志（中山大学）「中国海関史研究の新たな動向」
 張伝宇（暨南大学）「広東日本商工会議所研究」
 村井寛志（神奈川大学）「新中国成立前後の難民流入と港英政府の対応、1949 年」
 韋立新（広東外大）「日本軍占領期間の広州における新聞出版—日本軍や傀儡政権の新聞を中心に」
 大里浩秋（神奈川大学）「広州と日本人—雑誌『兵隊』を主な素材として」

である。

このうち曹善玉報告は、副題が示すように 1920～30 年代に中山大学に留学した、極めて政治的色彩を帯びた朝鮮人の動向を紹介するものであった。同時期黄埔軍官学校に入学した朝鮮人もおり、そうした受け入れは広東国民政府と在華韓国独立運動団体が協議した結果だという。張伝宇報告は、1937 年に広州に創立されて以降の広東日本商工会議所の動向を中心に、日本軍占領期を通じての広州在住日本人の状況を紹介するものであり、韋立新報告は、日本軍占領期の広州における新聞出版の概略を紹介するとともに、中日文化協会広州分会などの活動を通じて、占領地域に対する日本軍の「文化戦略」の中身に考察を加えたものであった。これら 3 人の報告はいずれも私にとってはまったく知らなかった内容であり、とくに張報告からは、近代以降 1945 年までの広州における日本人に関する資料はかなり調べられていることが窺われて、今後彼らの研究にさらに学びたいと思った。

次に、手前勝手であるのを承知で、上記 3 人以外の報告には 50 年来の友人濱下さんの報告を含めて触れず、広州について調べたり読んだりして感じたことを恣意的に並べたに過ぎないものながら、私が報告した内容を紹介したい。

私はまず、東亜同文会機関誌を取り上げ、そのうちの『東亜時論』や『東亜同文会報告』に数回載った「広東通信」、「広東来信」と題した記事によって、1899 年、1900 年に東亜同文会の会員が広州で新聞を発行したり、日本語学校を開設したりして、中国に対する日本の影響力を増そうとしたが失敗に終わったことを紹介した。周知のごとく、東亜同文会は日中親善を唱えつつも西洋諸国に負けじと中国における特権を得ることを主張して政府の大陸政策を後押しした団体であり、1945 年の敗戦まで延々と機関誌を発行している。そこには多くはないものの広州・広東に関する記事も時

折載っているが、ごく少数の日本人が広州に潜り込んで何やら画策した上記のような動きについて、私は興味をひかれているのである。

次に、草野心平（1903—1988）、火野葦平（1907—1960）、和久田幸助（1915—？）らの広州との関わりを、彼らの著書を通じて紹介した。

草野は、1921 年から広州に滞在し、今の中山大学のキャンパスにあった嶺南大学に留学していたが、上海の五・三〇事件に端を発して起こった 25 年の沙基事件によって広州でも排日運動が高まったことから、やむなく帰国するという経験をしている。さらに 40 年から敗戦までは汪精衛政権に協力して南京にいたこともあって、その辺の話聞きたくて私が取材を申し込んでご本人から承諾の返事をいただいたが、ついに実現に至らなかったという残念な思い出がある。火野は、1937 年に日中戦争勃発で出征し、従軍記『麦と兵隊』を発表して評判を得た後、38 年の広東侵攻作戦に南支派遣軍報道部員として参加、その従軍経験を今度は『広東進軍抄』と題する 1 冊にまとめ、広州で報道部機関誌『兵隊』創刊時の編集を主導した。草野も火野も、戦後 1950 年代半ばに中国政府に招待された旅行団の一員として別個に訪中しており、その折の見聞をそれぞれ『茫々半世紀』、『赤い国の旅人』の題で公刊しているが、とくに火野は、戦時中に自らが果たした軍隊内外での役割を反省しつつ、それから十数年を経て訪れた中国の変貌ぶりに触れ、その中で広州の様子に詳しく言及している部分は、私にはとても興味深かった。さらに和久田は、1934 から 43 年に広州と香港に滞在して、南支派遣軍の通訳や香港占領軍報道部芸能班長などを務めており、その経験を基にして書いた一連の『私の中国人ノート』は、当事者ならではの内容を含んでいた。

といったようなことを話した後で、火野が編集に関わった上述の雑誌『兵隊』を取り上げて、その中の記事や写真の一部を紹介しつつ、この雑誌の特徴をどうとらえるかについて、私の感想を述べた。

『兵隊』は、1939 年 5 月から 44 年 5 月まで月刊で計 39 冊発行された。復刻版を出すにあたって、出版社（刀水書房）が宣伝用パンフに並べたこの雑誌の特色は、次のようなものである。「・日本の兵隊の生きて生活した記録・戦っている兵士の投稿という他に例のない雑誌・兵士だけでなく、広東在留邦人や台湾人、現地中国人も書いている・一切の検閲がなかった。当時、内地にもない驚くべき戦時下の自由。これは南支派遣軍報道部長馬淵逸雄と初代編集長火野葦平の間で、「ありのままに書く」ことこそを重視していたかららしい。」などなど。私は、この宣伝文を頭に置きながら、『兵隊』のページをめくってみて、出版社が書きだしたこの雑誌の特色にそれほどの違和感を覚え

なかったのは、軍隊特有の使命感や命令調は誌面にあらわれることがあるにはあるものの、緊張を和らげるような穏やかな調子で、軍事情報や兵士の日常以外に在留日本人や現地住民の情報を拾い、周囲の農民のスケッチや街中の風景写真をふんだんに使った構成になっているからだと思った。しかし、そうだとすると、この雑誌には一切の検閲がなく、内地にもない自由があったとはとてもいえないかろうというのが、私の感想であり、私の報告を聞いてくれた人が共通して感じたことであった。逃れようのない戦場で聖戦を担わされている兵士たちが「自由に」発する言葉は、美しくもあり悲しくもあるというべきか。

申し遅れたが、軍隊自らが発行した『兵隊』という雑誌があることを教えてくださったのは、画家の石田一郎さんだった。敗戦直前に日華学会の事務を担当していた方だと戸川芳郎先生に伺って、並木頼寿さんと神田の日華学会旧址、今の東方学会の建物の一室でお話を伺ったのは 2007 年のことだが、日華学会での体験を伺う前に、戦前広州で南支派遣軍の戦闘に参加し、のちに報道部に移籍して『兵隊』の編集に携わり、自分が周辺の農村でスケッチした絵が時折誌面を飾ったという話に発展したのである。そして、その時石田さんにいただいた「戦争と私の兵隊観」という文章を後で読むと、石田さんは昭和 14（1939）年 11 月に広州市北郊「白雲山麓の近衛師団編成の第 21 迫撃砲大隊」に配属されたとあった。

そこでもう一つ申し遅れたことを述べさせていただくが、私が 1980 年に日本語教師として 3 年近く滞在した広州外国語学院、今の広東外語大は白雲山麓にあり、赴任した当時は、キャンパス内に日本軍が使った倉庫が売店として使われ、キャンパスの外に足を延ばすと、兵舎だったと思いきぼろ屋が残っていて小学校として使われていた。また、市内に通じる道路脇には数か所に格納庫や見張所がそのままの姿で残っており、道路からかなり入った野原には、某部隊忠魂碑が裏寂れた風情で建っていた。月日が経ちそのあたりは面目を一新して、今はどこに何があったのか見当がつかなくなってしまうが、かつて私が恐る恐る先祖の亡霊を訪ねる気分で覗いた建物群は、その 40 年ほど前に石田さんも出入りしていたかもしれない場所だったのである。

以上のような因縁から、広州における日本軍や広州に住んだことのある日本人への関心に広がり、雑誌『兵隊』に行き着いて、今回の私の報告になったという次第。ささやかなシンポジウムで報告しあったことがきっかけとなって、広州と日本人の関係を通しての日中関係史の研究が今後一層進むこと、また、『兵隊』に載った図像を含む各種の情報を中国の研究者も利用することで、広州の歴史の空白を埋める作業が進むことを願っている。

今回マイクロバスをチャーターして回った先は、順に黄埔軍官学校旧址、中山大学、沙面旧英仏租界、農民運動講習所、中山紀念堂。

黄埔軍官学校は、私の記憶にある 30 数年前のそれとは異なり、その周囲に土産物屋や食堂が並び、住宅もかなり建っていてかつての寂れた環境とは違っていた。敷地内も孫文や蒋介石などのオフィスのある建物だけを見て回った記憶からすると、1990 年代に再建したという（1938 年の日本侵攻の際の空爆で焼け出されたと記した看板があった）本部や学生宿舎が立派で、なぜだか復元というより造りかえられた空間を見せられている気になった。ちょうど開校 90 周年の展示があつて多くの参観者でにぎわっていたが、ふだんはどうだろうか。中山大学は、上述草野心平が留学した嶺南大学のキャンパスを 1950 年に引き継いで今に至っているが、ちょうど卒業時期とあつて、中国指折りの緑豊かなキャンパスはガウン・帽子姿の卒業生とその保護者でにぎわっていた。彼らがあちこちで記念写真を撮るのを横目にして、広場に鎮座する梅屋庄吉が寄贈した孫文の銅像と、キャンパス内に保存公開している嶺南・中山両大学で歴史を教えた陳寅恪の旧居を参観した。

沙面にある旧英仏租界は、数年前に行った時よりも公開性が進んでいる観があり、中を見せる建物もあったし、軒並み由来を記したプレートがついていた。西洋人女性にその辺を歩かせて写真に収めている集団があり、洋館をバックに結婚の記念写真を撮るカップルも数組いた。もともと他地の租界よりも独立した立地状況にあった沙面は、いつの頃からか帝国主義の建物群として否定すべき存在ではなくなってしまったのだろう。農民運動講習所は、私には馴染みの場所だったが、今回行って、一番の見せ所と思える教室が机や黒板を片付けられて鄧小平の生涯を多数の写真で説明する場所に転じているのを知り、がっかりした。最後に寄った中山紀念堂は、日本占領期にそれを正当化する各種の集会を住民動員の下で開いている写真が多数『兵隊』に載っているのを思い出しながら見上げた。

（なお、この小文は『中国研究月報』2014 年 7 月号に発表した内容に一定の増減を加えたものであることをお断りします。）

報告 2：1920 年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介と雑感

孫 安石

2014 年 6 月に開催された「中日関係と広州近現代史研究」の内容についてはすでに大里浩秋が「報告 1」で記しているので、ここでは私の報告「1920 年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介」と会議に参加して感じたことを一つ述べておくことにしたい。

孫安石「1920 年代の広東省からの来日留学生関連資料の紹介」は、広東省出身の日本留学生らが中心になり、1920 年 5 月に親睦団体として「珠江読書会」を組織する動きを紹介するものであった。この組織の創立に向けて日本側では広東領事館と台湾銀行、三井洋行などが資金を出資し、中国側では広東省長公署印刷官報局長（広東中華新報社長を兼任する）容伯挺が中心となって寄付金を集める計画であったが、その大部分を日本側が出資するという内情が広東省の新聞に報道されたことで 10 月には早くも解散に追い込まれることになった。

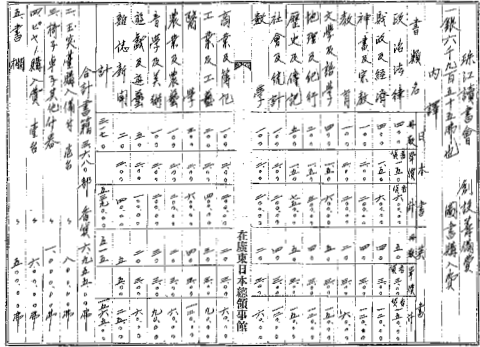


図 1 「珠江読書会創設籌備費」（外務省外交史料館所蔵、請求番号 B-1-3-1-137 より）

次に 1920 年代の広東省の来日留学生と日本との接点は、対支文化事業の開始という点からも生まれてくる。広東で発行された『七十二行商報』や『広州民国日報』などの新聞は、日本人の中国視察が華北地域に集中していることを度々批判し、中国の三大都市（北京、上海、広東）の一つである広州にも公平な施設を設置することを要求していた。その内容は、北京の人文科学研究所、上海の自然科学研究所に次ぎ、広州に工業試験所（中華工学会の要請）、または応用科学研究所（日本留学出身の 200 名の要請）、または医学校の設置を要請するものであった。その他に、台湾総督府が運営に参加した「博愛会医院」に対する経済的な支援なども要請された。

ところが、1930 年代に入ると東方文化事業の支援は、今までとは違い広東省の警察官僚の養成に集中的に投入されることになった。日本側の外務省外交史料館の資料によれば、広東では、広東高等警察学校の卒業者を日本の警察学校に入所させる計画が持ち上がり、1939 年の中華民国維新政府が成立された際には、広東治安維持会の活動を支援する動きが活発になったのである。

以上、本報告は広東省の日本留学生と関連のある動きについて紹介したが、中国の出身省別の日本留学生に着目した研究は一部、浙江省、江蘇省、湖北省、直隸省などがあるが、その他の省の出身地別の分析はまだ可能であることに気付いた。例えば、清末の留日学

生監督処が発行した『官報』によれば、湖北省は鉄道関連の留学生を多く派遣し、奉天省は師範学校と女子留学生の派遣に力を入れ、山西省は農業関連の留学生派遣に重点を置いたことが分かる。今後の中国人日本留学生史研究を進める時にこのような省別の留学生派遣の特徴はより注目されても良いのではなかろうか。

あと、もう一つ全体の会議に参加し感じたことは、広州と日本に関連する研究が、上海などその他の都市に比べて遅れをとっているのではないかという点であった。日本における上海研究は、1990 年代から日本上海史研究会の活動などもあり、幾つかの共同研究の成果が発表されている。また、上海の中国人研究者も日中関係や上海の日本人居留民に関する研究に積極的に取り組んでおり、『上海的外国文化地図』系列叢書（上海文艺出版社、2010 年）が刊行されるなど上海と外国（アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本、韓国）の近現代史の接点を究明しようとする動きが活発である。それに比べれば、広州と日本（その他の外国）との関連については未解明のところが多い。報告者の一人の韋立新氏は、日中戦争以降、日本に占領された広州で出版された新聞として『広東迅報』、『南支日報』、『中山日報』、『群声日報』、『公正報』、『新越晩報』などを取り上げたが、筆者はこれらの新聞をまだ見たことがなく、ぜひとも関連研究が継続してなされることを期待したいと思った。



中山大学キャンパス内の石碑



広州中山紀念堂—真ん中に建っているのは孫文の銅像

報告 3：中華人民共和国建国前後の難民流入と英領香港政府

村井 寛志

1949 年 10 月の中華人民共和国建国前後の香港—中国大陆間の入境政策について、イギリス公文書などによりイギリス側の対応を明らかにするとともに、中国語紙によって香港の中国人社会の反応を考察した。

日中戦争や、太平洋戦争期の日本占領を経て、香港の人口は急激な増加と減少を経験したが、戦後、1947 年頃には国共内戦の激化に伴って、再び大陸側から急激な人口流入が見られた。これを受けてイギリス政府内部では、アヘン戦争以来慣習上認められてきた中国人の香港への入境の自由についての見直しが議論されるようになる。中国人の入境の権利の慣習を重視する外務省と、その制限を主張する植民地省の間には見解の相違があったが、最終的には後者の主張に沿った入境規制法が制定される。

とはいえ、香港総督グランサムは、香港の自由港としての地位を守るため、また、難民の流入は一時的なものに過ぎないとの楽観的な見通しから、実際の規制強化に対しては消極的であった。しかし、1950 年以降中共による基層政権掌握の過程で「反革命」のレッテルを貼られた様々な難民の流入は、帰還や転出が望めない、新たな難民問題を引き起こした。ここに至り、英領香港政府は境界を鉄条網で封鎖し、入境規制の強化を図ることとなる。

これに対する中国語新聞における反応として、境界を往来して商売をする中国人商人からは反対の声が挙がったが、一方で、上海人の流入に反発する立場から、入境規制を歓迎する評論も出された。

なお、ワークショップ終了後、私費にて延泊して中山大学図書館を訪れ、同所蔵の『南方日報』など、報告で扱った時代の広州で刊行されていた新聞の調査を行い、香港と隣接する広東省の側から見た同時期の報道を通して、報告内容の補強を行うことができた。



会議の様子

2014 年度 非文字資料研究センター / 沖縄県立博物館・美術館主催 第3回公開研究会

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

日 時：2014 年 10 月 26 日（日）
13:00 ～ 18:00

会 場：沖縄県立博物館・美術館 講堂

開会挨拶：安里 進（沖縄県立博物館・美術館長）
内田青蔵（非文字資料研究センター長）

開催趣旨説明：渡辺美季

報 告：富澤達三（非文字資料研究センター 客員研究員）
豊見山和行（琉球大学 教授）
得能壽美（法政大学沖縄文化研究所 兼任所員）
川野和昭（南方民俗文化研究所 所長）

コメンテーター：①田名真之（沖縄国際大学 教授）
②津波高志（琉球大学 名誉教授）
③石垣博孝（石垣市文化財審議会委員長）
④本村育恵（青山学院大学大学院 博士課程）
⑤真栄平房昭（琉球大学 教授）

コーディネーター：渡辺美季（東京大学 准教授） 小熊 誠（非文字資料研究センター 研究員）

後 援：浦添市美術館 石垣市教育委員会 名護博物館



〈公開研究会〉『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

渡辺 美季

1. はじめに

2014 年 10 月 26 日(日)、非文字資料研究センター／沖縄県立博物館・美術館の共催による公開研究会『『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界』が開催された。2014 年 3 月に刊行された『『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編』の研究成果を広く紹介するとともに、その内容を多角的に論じることで、絵引研究のさらなる可能性を探ることを目的としたものである。計 4 本の報告とコメント・総合討論で構成された研究会には、センターの公開研究会史上最多となる約 150 名の来場者があり、絵引研究に対する関心の高さがうかがえた。

各報告の内容は報告者自身による紹介記事があるの

で、ここではコメント・総合討論の概要を紹介したい。

2. コメント

田名真之氏（コメント①）は「琉球交易港図屏風」（浦



会場の様子

添市美術館蔵）について、内容・年代・製作目的・製作者という 4 つの観点から考察を行った。特に製作目的に関しては同様の類図との比較検討から、薩摩（の士・商人・船員）向けに描かれた可能性が高いことを指摘しつつ、それにもかかわらずどの絵にも薩摩の在番奉行所（那覇にあった薩摩役人の駐在所）が描かれていないのはなぜなのか、そこにどのような意図があるのかを探ることが課題であると指摘した。

津波高志氏（コメント②）は「琉球寫真景」（名護博物館蔵）に描かれた相撲について、土俵およびチカラウバンと呼ばれるふるまい料理を例に挙げ、過去から現在にわたる民俗事例との比較によって絵図の内容がより理解できることを示した。

石垣博孝氏（コメント③）は、「八重山蔵元絵師画稿」（石垣市立八重山博物館蔵）を含む八重山の文化財の概況を説明した後、画稿のかつての所蔵者である鎌倉芳太郎氏との出会いや、鎌倉氏が画稿を八重山博物館に寄贈するまでの経緯を、自身の体験をもとに披露された。

本村育恵氏（コメント④）は、「八重山蔵元絵師画稿」との比較という視点から、文献史料に見られる宮古島の絵師について紹介し、また「琉球交易港図屏風」に描かれた琉球の渡唐船を、東洋文庫蔵『亜細亜大観』第 4 輯 4 に収録された福州船の写真と比較検討し、渡唐船の船尾装飾の詳細を解明した。

真栄平房昭氏（コメント⑤）は、「琉球交易港図屏風」に描かれた那覇の^{かたばる}潟原における製塩風景（塩田と競馬）に着目し、文献史料（特に異国人が残した記録類）や写真・画像史料を駆使して、描かれた製塩風景を詳細に読み解いた。

3. 総合討論

総合討論はコーディネーターである渡辺美季が司会を務め、来場者から提出された質問票に基づいて進められた。質問は「澁澤敬三の時代と現在とでは『絵引』やその作成方法にどのような違いがあるのか」など絵引そのものに対するものから、「絵引では絵図が持つデフォルメやフィクションをどのように考えるのか」という絵図分析のスタンスを問うもの、また潟原の競馬の担い手、八重山の投網の方法、奄美の髪型の規則性の有無といった絵図の各部分の読み解きに関わるものなど多岐にわたり、活発に議論された。



総合討論の様子

絵引の可能性は、絵引が刊行され、多くの人の目に触れることになったこの段階から、本格的に開拓されていくものであろう。この公開研究会が、我々が世に送り出した絵引についての、さらなる議論の起点となることを願っている。

補則（小熊 誠）

沖縄県立博物館・美術館での公開研究会は、渡辺美季先生と自分でコーディネーターを務める予定だったが、よんどころない理由で開催直前に出席がなくなってしまう。関係者には大変ご迷惑をおかけし、恐縮の至りであったが、それでも 150 名を超える参加者にお越しいただき、この公開研究会は大成功であった。

『日本近世生活絵引』の奄美・沖縄編は、それぞれの専門家によって作成されたもので、完成度は比較的高いと考えられる。そして、その図像から読み取れる情報はかなり多い。進貢船もあるが大和船もあるし、サバニもあれば伝馬船もあるというような、近世のその時代の歴史的事実を読み解くだけでなく、それらの木造船の構造などの違いを研究することもできよう。あるいは奄美の大和相撲の画像と現在行われている相撲行事の比較研究も可能である。これから、この絵引を利用して、近世の図像をフィールドワークすることが歴史学と民俗学の協働として可能である。

この公開研究会の続きを、3 月 21 日に神奈川大学で開催予定である。この絵引を利用してどのような研究ができるのか、継続して検討していきたい。

末筆で恐縮だが、公開研究会でご発言いただいた方々、そして会場のご提供をはじめ様々なご協力をい

ただいた沖縄県立博物館・美術館にも改めて深く感謝の意を表したい。

報告 1：絵引研究について

富澤 達三

1. 澁澤敬三の絵引研究

澁澤敬三発案の「絵引研究」の実作業は、有賀喜左衛門によると、まず澁澤家所蔵の中世絵巻の模刻本などから「常民」的な場面を選択し、画家（戦前は橋浦泰雄、戦後は村田泥牛）に模写を依頼し検討用の図像を作成した。それらを複製して検討し、番号を振って事物や行為に注釈をつけていった（『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻、x～x iii）。

そして「一 住居」「二 衣服」「三 食事」「四 調度・施設・技術」「五 資糧取得・生業」「六 交通運搬」「七 交易・交易品」「八 容姿・動作・労働」「九 人生・身分・病」「一〇 死・埋葬」「一一 児童生活」「一二 娯楽・遊戯・交際」「一三 年中行事」「一四 神仏・祭・信仰」「一五 動物・植物・自然」の 15 項目が設定され、絵巻は場面順でなく、項目順に並べられた。

2. 「絵引研究」の継続

2003 年、本学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が 21 世紀 COE プログラムに選ばれ、澁澤の「絵引研究」を受け継ぐ試みが始まり、試案本 5 冊が出された。事業は日本常民文化研究所・非文字資料研究センターで継続され、「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」の 3 作品を素材に、2014 年春『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編が刊行された。

ところで、千葉正樹氏は『江戸名所図絵』の挿図分析から、近世図像の「絵から図」への変化、「絵と図の融合」等の変化を実証研究した（『江戸名所図会の世界—近世巨大都市の自画像』吉川弘文館、2001 年）。

千葉氏は近世の俯瞰図・鳥瞰図的図像を以下の 4 視点に大別した。

- ①近景…対象から約十 m 以内の視点。男女の別・老若・身分・職業・各人の容貌・着物の文様まで描く。
- ②中景…対象から数十 m。男女や老若の違いなどが簡略化されるが身分の判別などは可能。顔の表情は一本の線で描かれ容貌は省略。
- ③遠景…対象から百 m 以上離れた視点。人物の身分や職業は「武士＝刀二本差し」等の類型表現で描かれ、顔は白抜きとなる。
- ④超遠景…対象から数百 m 以上。広域の景観を描き、建物は簡略化、人物は縦の短線で描かれる。

千葉氏の分析にならえば「琉球交易港図屏風」は「③遠景」で描かれている。那覇港の景観・人々の暮らし・交易や祭礼場面が描かれ、情報量は極めて多い。「八重山蔵元絵師画稿」は「①近景」を基本とし、図的な線画で人々の老若・性別・身分や容貌が描き分けられる。浮世絵版画の「大首絵」を思わせる「超近景」による異国人の顔の図像もある。「琉球寫真景」は絵画的完成度が高く「①近景」～「④超遠景」の 4 視点を駆使し、奄美大島の景観・人々の生活場面を描いている。

3. おわりに

最後に、現在はデジタル技術の進化で、貴重な図像史料の詳細検討が可能となり、「絵引研究」が進めやすくなったこと、「絵引研究」は独力では困難であり、多くの専門研究者が共同研究で知識を共有し、分析視点を広げることの重要性などを指摘した。なお私自身は、「絵引」作成にあたり、澁澤が絵引研究に際して設定した、前記 15 項目を明確に意識していなかったが、試案本ではそれらがはからずも盛り込まれ、あらためて澁澤敬三の図像史料への視点の鋭さ・明快さを再確認した。



富澤 達三氏



豊見山 和行氏



得能 壽美氏



川野 和昭氏

報告 2：琉球交易港図屏風からみる琉球の世界

豊見山 和行

琉球史の分野において、研究の素材となる史資料は豊富とはいえない。また、図像史料も限られている。しかし、図像史料は文字主体の文献史料にはない豊富な情報を有している。

筆者は図像学の知識は乏しいが、歴史研究の分野から琉球の図像について、次のような方法を用いる。図像そのものの読み解き、すなわち図像テキストそのものの読解と図像の外のテキストとを交差させて読み解くことである。具体的には次の作業を行った。

第一に、「琉球交易港図屏風」の全体的特徴として、主要な三つの行事（進貢船の帰国風景、爬龍舟競争（ハーリー）、潟原における競馬（馬寄せ、馬揃え）を中心に描かれたものであることを紹介した。

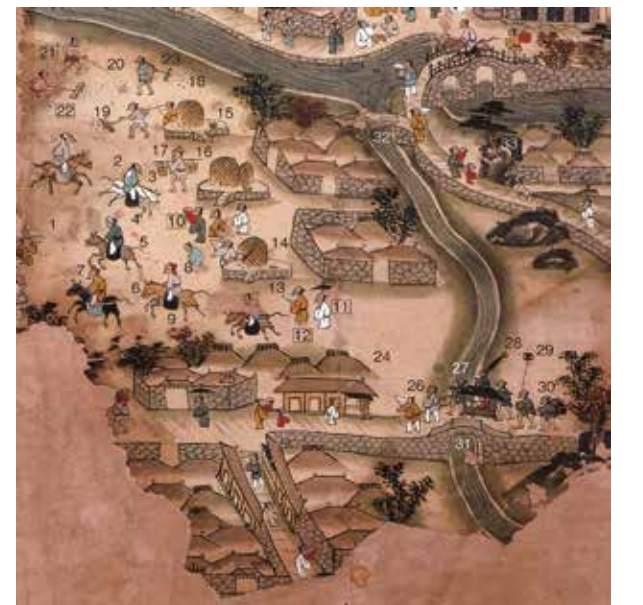
第二に、那覇のハーリーと遊女・商売・童子の弄物などを記載した書状（琉大附属図書館宮良殿内文庫「文書綴」、咸豊 10（1860）年成立）を用いて突き合わせを行った。その書状（案文）では、爬龍舟競争の生き生きとした叙述や、それを見学する周辺関切からの多くの観客（野次馬）が天幕を設置し、あるいは小舟でこぎ出して応援していたこと、そして玩具売りに精を出す商人、華美な衣裳の女性たち（遊女）、赤覆面で舞う人々の様相など、ハーリーが那覇における祝祭的なものであったことを文献史料からも示した。

第三に、通堂で接待をうける薩摩役人の場面については、関連する那覇役人の日記（「玉城親雲上御物城日記」道光 9（1829）年）などを用いた。また、首里城へ向かう在番奉行の一行については、「首里那覇港図屏風」（沖縄県立博物館・美術館蔵）を検討した。

第四に、図像の馬・競馬をめぐる問題について、船舶の入港時に騎馬で首里城へ急報することを「親見世日記」から示した。潟原での馬寄せの場面を理解する上で、同日記乾隆 53（1788）年 1 月 12 日条から、

旧来の正月 16 日の馬寄せは「16 日の墓参が盛んとなり支障が生じている」として正月 20 日へ変更されたこと、琉球王国末期には、正月 21 日が定日となったことを日記史料から示した。

図像史料をより深く読解する上で、文献史料との突き合わせは必須であること、さらに多様な視点からの分析には、多くの研究者の眼が必要であることを結論とした。



潟原における競馬の図（1-14 潟原）

報告 3：八重山蔵元絵師画稿からみる八重山の世界

得能 壽美

石垣市立八重山博物館蔵「八重山蔵元絵師画稿」は、1923 年鎌倉芳太郎が琉球芸術の調査のために石垣島を訪れた際、最後の絵師となった宮良安宣の画稿を譲り受けたもの。全 114 点からなり、琉球王国末期から明治期の生活を描いた作品が多い。



田名 真之氏



津波 高志氏



石垣 博孝氏



本村 育恵氏

これまで「八重山蔵元絵師画稿」を、八重山研究の資料として積極的に用いた論文などはあまり多くない。たとえば、近世八重山における生業は、『絵引』No. 27 に農業以外の多様な仕事を描かれているが、実態としても分業されていない（専業漁民も不在）。さらに、近世の農業と人頭税に注目すると、No. 22 の稲蒔りは、一家族の人数を超える多くの人が従事し、種々の理由から住居から離れた場所の水田とわかり、ユイによる遠距離通耕を示している。

No. 24（右図）の図像を縦横に四分割すると、左上の棧敷での役人たちと右下の稲束の計量は人頭税の納入にかかわり、左下の運搬と右上の保存のためのシラ（稲叢）作りはもともと民衆生活の一部といってよい。No. 25 俵の運搬と収納でも、右半分の役人と計量、左半分の俵の作成と運搬は、同様の対照である。



渡辺 美季氏



真栄平 房昭氏



No.24 貢納と稲叢（II-24 貢納と稲叢）

今回の『絵引』作成作業は、このような視点も与えてくれた。今後、より細部にわたって、八重山研究の資料として「八重山蔵元絵師画稿」が利用されることになるだろう。

なお、このほか八重山関係の画像資料に、①大島広写真資料（八重山博物館、蔵元絵師画稿）、②西常央関連資料（県立博物館・美術館）、③「八重山諸島村落絵図」（県立図書館）、④久場島清輝資料（八重山博物館）、⑤大田正議資料（同前）などがある。⑤は明治 37 年石垣生まれの大田正議氏の作品で、「昔の商店街」「石垣島測候所」「明治時代の八重山郵便局と電信局」など全 31 点からなる。当時の八重山博物館破名城泰雄館長の依頼によって作成されたもので、画中に物の解説が注記されていて、すでに「絵引」を実践している。

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編 正誤表

頁	誤	正	頁	誤	正
14（Ⅰ -7- 解説文 5 行目）	1660 年代頃	1680 年代頃	110（Ⅲ-43）	3、4、6 の位置	右の図の赤字の位置に移動
25（Ⅰ -12-a）	a バクチャ	a バクキヤ	111（Ⅲ-43-3）	3 テラヤマ	3 ユネシヤマ
32（Ⅰ -16- 図中）	-	9 下部の 10 を削除	111（Ⅲ-43-4）	4 名音〈地名〉	4 テラ
57（「琉球交易港図屏風」図中）	-	⑩を図右下の缸へ移動	111（Ⅲ-43-6）	6 大和浜〈地名〉	6 名音〈地名〉 ノン
63（Ⅱ -19-a）	a 薩笠	a 藍笠	111（Ⅲ-43-9）	9 作小屋 ヤドリ	9 旧集落跡
85（Ⅱ -31-3）	3 常緑の葉？	3 常緑の葉 雪松	116（Ⅲ-45（1））左側下から 2 行目	ユカリッチュと呼ばれる上層階級の家と思われる。	こうした構造から、普通の民家ではなく薩摩藩士の駐在する仮屋であると思われる。
158（本文・右 3 行目）	バクチャ	バクキヤ	117（Ⅲ-45（1））上から 1 行目	家主夫婦と見られる	景気づけをする役回りの
159（2-（5）-③部分 2）	b バクチャ	b バクキヤ	118（Ⅲ-45（2）-7）	7 家主	7 景気づけをする男
202（索引）	常緑の葉？	常緑の葉 雪松	118（Ⅲ-45（2）-21）	21 家主の妻	21 景気づけをする女

報告 4：『琉球寫真景』と奄美の民俗文化の世界
—「内的比較」と「広域的比較」による自文化の理解—

川野 和昭

『琉球寫真景』は、名護博物館が所蔵する 11 景からなる絵図で、1987（昭和 62）年琉球新報社から同社北部本社創立 3 周年を記念して寄贈されたものである。当初、その名称と、描かれた山がちな風景から沖縄本島北部の山原地域を描写したものと理解された。

しかし、琉球大学の津波高志の指摘によって、描かれている地域は奄美大島であることが明確にされ、その後、津波と名護博物館の比嘉武則らによって研究が進められてきた。

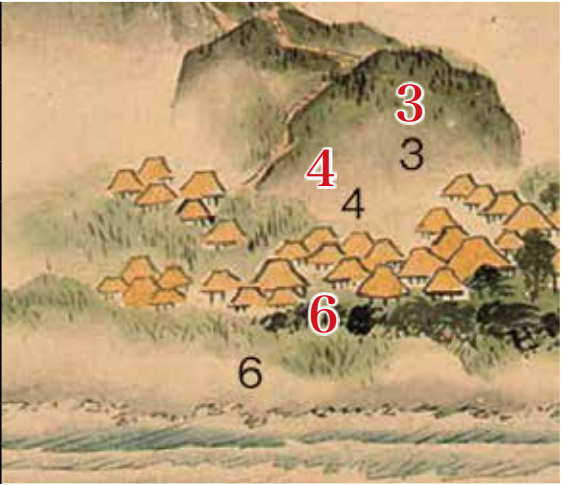
筆者は、それらの研究成果を高く評価しながら、津波が言う「琉球全体」との比較領域を東南アジア大陸北部の少数民族にまで広げた「広域的比較」と、比嘉が言う『南島雑話』との比較に、これまで民俗学が蓄積してきた奄美の民俗学的資料を加えた「内的比較」を試みることによって、『琉球寫真景』は、初めて「アジアに開かれた奄美」、「日本という国境の枠を越える奄美」を示す可能性を主張している。

今回の那覇における研究報告は、その成果の一端であり、比較の指標となりうる描写の幾つかを取り上げて絵解きを試みたのである。第 2 景の萱の根本を内側に葺き込む高倉の屋根の葺き方、ハレコギ（爬龍舟漕競争）、第 3 景のバシヤタバイ（芭蕉の茎の束）を額負うティル（背負い籠）、女性が被るウックイ、サージと呼ばれる被り物、第 5 景のサタグルマ（砂糖搾り機）、それを引く馬や脇で草をはむ馬の頬に掛けられ

たオモゲ（制御具）、耕地を打ち返すトウゲ（唐鋤）、男性が着るウンジョウ（裂き織りの袖無し）、第 6 景の八月踊りの女性たちが持つチゼン（楔締め太鼓）、女性たちの結髪の五つの形、第 7 景の馬の着けたオモゲ、女性たちが被るウックイ、女性たちの背負ったティルとその背負い方、カタボウ（肩に通した支え木）を使った木の運搬方法、漁帰りの男の担ぐイベラク（魚籠）、第 8 景の集落から離れたボレグラ（群れ高倉）などである。これらの民俗文化は、奄美、琉球の共通性を越えて、東南アジアの大陸部の少数民族の民俗文化と共通することが明らかになってくる。

さらに言えば、第 9 景の黒豚と耳に通した綱による制御方法はフィリピンとの関連性が指摘されるように、奄美の民俗文化の東南アジア島嶼部的性格を帯びた文化を描き出しているのである。

また、第 10 景の相撲の描写は、大和（日本）との関連が深く認められるというように、奄美のというよりも南西諸島はおろか、日本列島の文化の多様な構造を解き明かす可能性を持っていると言える。『琉球寫真景』が、『南島雑話』とともに奄美の民俗文化の持つ多様な有りようを解きほぐす、極めて重要な民俗図譜としての非文字資料であることは動かしがたいことである。その前提に民俗学による地域資料の蓄積が不可欠の要素であることは論を待たない。奄美にとってまた自己の文化理解のための比較の視点を獲得したと言えよう。



＊ 研究会報告 ＊

『海外神社跡地のその後』研究会

日本統治時代の台湾に於ける酒専売と構内神社

日時：2014 年 6 月 14 日（土）15:00 ～ 18:00

場所：神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 207 教室

金子 展也（非文字資料研究センター 研究協力者）

海外神社（跡地）班の 2014 年度第 1 回研究会は、6 月 14 日午後 3 時から 6 時まで、本学横浜キャンパス 3 号館 207 教室で行われた。本研究会は 2013 年度に各研究員、研究協力者が行った現地調査について、それを班全体の共通の認識にするために、また我々の研究・調査活動を社会に還元するために一般の方にも公開して行った。参加者は約 30 名であった。

当日の報告者及び調査地は①津田良樹・台湾、②金子展也・台湾、③渡邊奈津子・中国南部、④稲宮康人・中国北部、⑤諸葛衍・韓国济州島、⑥稲宮康人・南洋諸島であった。

この内、②の金子展也の報告を除く、諸報告は『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』（2014 年 3 月 20 日、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター）、ニューズレター『非文字資料研究』32 号（2014 年 7 月、同）および年報『非文字資料研究』（2015 年 3 月刊行予定、同）に掲載あるいは掲載予定であるので、ここでは金子展也氏の報告のみ載せる（研究班代表 中島三千男）。

日本統治時代の台湾に於ける酒専売と構内神社

はじめに

1920 年、アメリカ合衆国において禁酒法が成立する。そんな中で、日本統治時代の台湾では大正 11 年(1922)、世界でも稀な酒専売が導入される。この制度により、台湾総督府の財政状況は格段に飛躍し、その財源はその後台湾におけるインフラの整備および産業の発展に大いに貢献する。本調査では、台湾総督府の財政を改善した専売事業の酒専売を取り上げ、これらの酒専売工場に造営された構内神社と現在の景観の変容を紹介する。

I. 酒専売制度

酒専売制度創始の台湾に於ける酒類の製造

専売制度創始直前に於ける酒類は米、糖蜜¹、高粱(コーリャン、モロコシの一種)、甘藷(サツマイモの漢名)

等を主な材料とし、これに台湾独特の白麴(こうじ)のようなものを加えて発酵させ、蒸留して得られる蒸留酒が主であった。これらは米酒、糖蜜酒、高粱酒、甘藷酒といわれた。これら蒸留酒に漢薬を加えて加工した再製酒があり、再製酒には米酒に紅麴と粳米(うるちまい)を加えた紅酒がある。また、醸造酒として清酒、紹興酒、蒸留酒にも焼酎、泡盛があった。もちろん、これ以外に内地より移入される清酒や麦酒もあった。また、葡萄酒、支那酒、シャンパン、ブランデーなど内地または諸外国から移入・輸入されるものもあり、これらを全て合わせて酒類の需要は約 16 万石²弱といわれた。

そして、これら輸入酒に対する輸入税の他、台湾内製造酒に対して明治 40 年(1907) 10 月 8 日、台湾酒税税規制を制定し、醸造酒、蒸留酒、再製酒を通じて含有酒精(アルコール)に応じて 4 種類に区分し、造石税を課した。その後、明治 43 年(1910) 11 月、4 種類を 5 種類に改め、大正 9 年(1920)・10 年(1921) 年の改正を行った。この結果、明治 41 年(1908) の酒税収 49 万円に対して、酒専売制度導入 2 年前の大正 9 年には 505 万円に伸長している。

インフラの整備と専売事業への陰り

大正 4 年(1915) に行われた第 2 回臨時台湾戸口調査で、台湾の人口は約 360 万人であり、この時の台北の人口は僅か 12 万人余りであった。翌年の総督府の収支は歳出計 4,200 万円に対して歳入は 5,500 万円で、1,300 万円の黒字であった。大正 4 年、丁度、第 5 代佐久間総督による「5 箇年計画理蕃事業」が終了し、いよいよ道路整備、築港、電力の供給など基幹産業を支える大型投資が必要となるインフラの整備に入ろうとする段階であった。

しかしながら、当時の総督府の財政を支えた阿片収入は 681 万円であり、食塩 94 万円、樟脳 653 万円、煙草 532 万円であった。阿片は漸禁政策を標榜しているため、伸びは期待できない。樟脳は楠木の伐採が今後の

需要に対して対応できるか、更には樟脳を原料としたセルロイドからプラスチックへの材料革命は大きな不安を与えた。唯一、嗜好品として安定的に総督府の財源を潤すものは煙草であった。

酒専売局設立の背景―賀来長官の発案

賀来(かく) 佐賀太郎が専売局長に就任した後の大正 3 年(1914)、台湾総督府の財政を支えてきた樟脳は市場価格が変動し、財政面では不安要素を常に抱えていた。当時、台湾で製造販売されていた酒精は蒸留酒が主であり、清酒はその製造上の難しさから、内地からの移入品が多くを占めていた。また、台湾製の酒はアルコール度が一定しておらず、更に粗末な酒造設備など衛生上の問題も抱えていた。その意味で財政と国民保健を目標として「酒専売」は絶好な切り札になると賀来専売局長は結論付けた。しかしながら、これまでの製造および取扱業者の既得権の侵害、官営そのものに対する不安や品質の確保などの問題で頓挫した。当時の主な反対理由は下記の通り。なお、この時、麦酒は専売の対象とならなかったのは、当時島内には製造会社がなく、全て移入であったためである。

- ① 歳入の増加を図るのであれば、新事業を起こさなくとも酒税率を引き上げればよい
- ② 製造業は国家企業としては危険が多い
- ③ 酒専売は日本として前例がない

大正 10 年(1921) 7 月、下村民政長官を引き継いで総務長官³ となった賀来は、台湾統治時代に於ける最初の文官総督となった第 8 代田総督に酒専売の必要性を具申する。賀来は、上京した際、原総理大臣からは、「わかった君の云うとおりには大丈夫か。大丈夫ならやりたまえ。秘密にすることは然るべきも、高橋蔵相だけには是非話して同意を求め置く必要あり」との快諾を得、高橋蔵相からも賛同を得る。台湾に戻った矢先、その原総理大臣が暗殺される。

再度、賀来総務長官が上京し、衆議院予算会議で酒専売案が通過する。この時の総理大臣は、原内閣時代の蔵相で、酒専売案の説明を受けた高橋是清(これきよ) であった。「台湾に酒専売制度を実施することについては原首相が承諾を與へられ、この高橋もその時からの承知していたのである」とのことだった。

酒専売制の導入

大正 10 年 12 月 14 日、台湾日日新報は「酒専売の実施 --- 愈々来年度から」という見出しで報道した。「総督府にては豫てより酒専売に関し私に調査研究中なりしか昨今に至り既に成案を得 11 年度より実施すべく右に関する予算を編成し目下大蔵省との間に交渉中なり

と言う。而して之が理由とする所は

1. 国民保健衛生上の見地より之を必要とするにあり。現在の本島酒なるものは何らの統一なく、従って品質また区々に互りて衛生上甚だ憂ふべきもの多きを以て之を改良統一して保健上可能でき優良のものにたらしむるにあり。
2. 現在の酒造家は何等の統一なく、従って自然競争に陥り易く此の結果として粗製品を廉売するの外なし。故にこれを専売と為すに於いては各所に點在せる工場を纏め其間の冗費を省き得るを以て専売実施に於いて価格を引き上げる事なくして品質優良のものを供給し得るにあり。
3. 財政困難の現状にあるも而も此場合新税を課する事は到底忍びざる處なり。然るに酒専売を実施すること依り此収益を以て財源の不足を補ひ得べし。

尚、其他に於いても専売を利益とする理由は種々あるべきも、主とする處は右三箇所條の基礎を置くものの如し。

大正 11 年(1922) 7 月 1 日、台湾酒精令が公布され、酒類の専売制が導入され、従来の民営酒造所約 200 箇所に対して酒造を禁止した。そして、民間の酒醸業者は全て専売局の管理となった。

酒類専売制度施行に伴う初年度の酒類製造計画は、およそ 15 万石であり、これを製造する工場については従来の製造工場を接収し、これに補修を加えたものと、当局に於いて新たに建設するものとした。しかしながら、工場の建設は短期間に完了することが出来ないため、工場の接収のほか、借用する規定が酒類専売令第 27 条で定められた。このことにより、下記 20 箇所が選定され、台湾総督府専売局内に酒課が創設された。

【酒専売に於ける接収対象工場】

台北工場(日本芳醸株式会社)、有明分工場(艋舺龍泉製酒商会)、太平分工場(黃東茂工場)、宮前分工場(台湾製酒株式会社)、樹林工場(樹林紅酒株式会社)、樹林分工場(龍津製酒公司工場)、宜蘭工場(宜蘭製酒株式会社)、新竹工場及新竹分工場(鄭雅詩および林見舜工場)、豊原工場(中部製酒公司)、台中工場(大正製酒株式会社清酒工場)、台中分工場(何振徳工場)、嘉義工場(大正製酒株式会社)、斗六工場(大正製酒株式会社斗六工場)、埔里工場(埔里社酒造株式会社工場)、台南工場(台南製酒株式会社工場)、旗山工場(旗山釀造株式会社工場)、恒春工場(恒春芳醸株式会社工場)、台東工場(増永三吉工場)、花蓮港工場(宜蘭振拓株式会社工場)

【支局、出張所および工場の設置(5 支局、12 出張所、1 工場)】

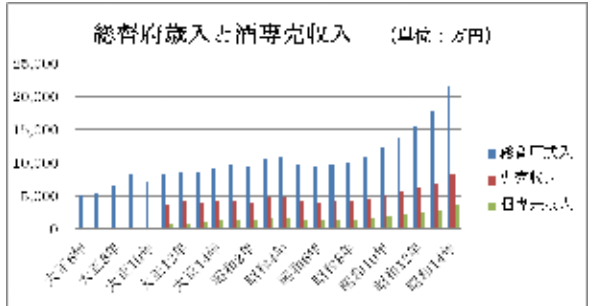
台北支局―基隆出張所、宜蘭出張所、新竹出張所
台中支局―豊原出張所、埔里出張所
台南支局―嘉義出張所、高雄出張所、旗山出張所、

屏東出張所、恒春出張所、澎湖出張所
花蓮港支局—台東出張所
神戸支局
樹林酒工場

酒専売制導入に酒専売収入推移

酒専売制の導入により、下記の表に見る通り、総督府の歳入が著しく改善された。また、昭和8年(1933)には麦酒も専売の対象となり、高砂麦酒株式会社が接収され、翌年には、263万円の収入があった。

表1 酒専売制導入後の酒専売収入推移(注—専売収入に酒専売収入は含まず)



II. 専売局に造営された神社

景観の変容

戦後、全ての総督府の専売工場は国民党政府に接収され、台湾省専売局として阿片以外の専売事業を継承した。1950年代になると台湾の公売制度に修正が加えられ、食塩が専売対象から除外され、石油は台湾中油に専売業務が移管され、度量衡儀器およびマッチは民間の取扱いとなった。1980年代末には樟脳が専売事業から除外され、専売業務はタバコと酒のみとなったが、それも1990年代に漸次民間に開放された。

1987年、台北工場であった台北酒廠が、環境などの問題から桃園県に移り、紹興酒を中心に製造を始めた。また、1989年、板橋酒廠も、環境の問題により台北酒廠と合併し、最新の設備を備えた紹興酒の専門工場となった。台中酒廠も1998年に台中工業区に移った。

表2 構内神社一覧表

酒造工場名	神社名	鎮座日	祭神	現在の状況
台北酒工場	松尾神社	大正12年10月1日	大山咋神、市杵島姫命、大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王	華山1914文化创意産業園區
板橋酒工場	不明	不明	大山咋神、市杵島姫命	桃園酒廠
樹林酒工場	太平神社	昭和10年9月7日	大山咋神、熊野久須毘命、市杵島姫命、大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王	樹林酒工廠
宜蘭酒工場	大山神社(大明神社?)	昭和12年3月29日	大山咋神、市杵島姫命他	台湾菸酒公司宜蘭酒廠
台中酒工場	松尾神社	大正13年	大山咋神、市杵島姫命、熊野久須毘命	台中文化创意産業園區
花蓮港酒工場	松尾神社	昭和5年?	大山咋神、市杵島姫命	花蓮文化创意産業園區
埔里酒工場	松尾神社	昭和9年7月1日	大山咋神、市杵島姫命	埔里酒廠
嘉義酒工場	不明	不明	大山咋神、市杵島姫命	嘉義文化创意産業園區
屏東酒工場	大明神社	昭和14年前?	大山咋神、市杵島姫命	平地
台東酒工場	不明	不明	大山咋神、市杵島姫命	台東兒童故事館
台北麦酒工場	不明	不明	大山咋神、市杵島姫命	建国啤酒廠

2002年、台湾は世界貿易機関(WTO)の加盟国になり、同時に100年近く続いた酒たばこの専売制度が廃止され、新しく「酒たばこ管理法」と「酒たばこ税法」が施行された。そして、同年7月1日、公売局は民営化され、「台湾菸酒股份有限公司」となった。

現在もなお、酒工場として使用されているのは、宜蘭工場、樹林工場と埔里酒工場の3箇所となっている。2002年、台中酒廠が台中市政府によって文化遺産と認定されたことから、この工場エリア一帯を台湾の建築、デザイン、芸術の発信地とする動きが強まり、現在は工場の建物を利用し様々なアートやデザインの展示、また音楽のパフォーマンスや各種イベントなどが開催される「文化创意産業園區」となった。同じように、台北酒廠、花蓮港酒廠や嘉義酒廠も文化创意産業園區となっている。

構内神社

専売局に於いては、酒工場を有する支局および出張所には全て構内神社が造営された⁴とあるが、その造営に関する詳細は一部の工場に於いてのみである。これら分り得る酒工場の構内に造営された神社を纏めると下記の一覧表となる。特徴として、京都松尾大社の大山咋神(おおやまくいのかみ)と市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)の二神を祀る。大山咋神は社殿裏の大杉谷の霊泉で酒を醸したといい、現在でも境内の神泉舎にはこの霊泉が引かれており、酒造家はこの神泉を持って仕込みにかかるという。このように松尾大社の祭神は「お酒の神様」として崇められている。市杵島姫命は天照大神が安河原で、須佐之男命(すさのおのみこと)の剣を3つに折って誓約した際に生まれたという三女神の内の一神である。この三女神は宗像三神と呼ばれ、北九州の宗像大社の祭神である。また、弁才天と同一とされ、水の神とされている神である。

一方の熊野久須毘命(くまのくすびのみこと)とは天照大神と須佐之男命の誓約の際、須佐之男命は天照大神の八咫勾珠(やさかのまがたま)を乞い受けて、天真名井(あめのまない)の聖水ふりすすぎ、囃んで吹き捨て

た。その息(狭霧)から五神が生まれた。熊野久須毘命は、その内の一柱。熊野久須毘命は「奇し霊」(神秘的な神霊)もしくは「奇し火」の意と考えられる。「クマノ」は熊野のことであり、出雲の熊野大社(島根県松江市)、そして、紀伊の熊野三山のこともされる。熊野大社の現在の祭神は「熊野大神櫛御気野命」であるが、元々の祭神はクマノクスビであったとする説がある。

当時の神社と現在の景観

1) 台北酒工場



往時の松尾神社(出典:台湾酒専売史)



華山1914文化创意産業園區

2) 樹林酒工場



樹林酒工廠

3) 宜蘭酒工場



台湾菸酒公司宜蘭酒廠

4) 台中酒工場



往時の松尾神社(出典:原公売局第五酒廠)

5) 花蓮港酒工場



花蓮文化创意産業園區(神社は中央の樹の辺りにあった)

6) 埔里酒工場



往時の松尾神社(提供:埔里酒廠)



埔里酒廠(売店奥で、神社が造営された場所)

7) 嘉義酒工場



嘉義文化创意産業園區



構内神社の遺跡は嘉義觀光酒廠に移設されている

8) 台北麦酒工場



建国啤酒廠

註釈

- 当時の一般的な酒造工場とは別に、製糖会社が原料であるサトウキビを原料とする蒸留酒が台湾製糖、新高製糖、帝国製糖、明治製糖、塩水港製糖、大日本製糖や東洋製糖で製造され、主に内地に移出された。
- 石は酒の単位。蔵元がどのくらい酒を生産しているかを表す時などに使う。1石は180リットルで、一升瓶なら100本分。16万石は1,600万本の一升瓶となる。
- 第8代田総督(大正8~12年)から従来の民政長官は総務長官と改称された。
- 台湾酒専売史 下巻1,074頁

参考文献

台湾酒専売史

上巻および下巻

台湾総督府専売事業

専売制度前の台湾の酒

台湾の専売事業

台湾総督府専売局 1941年

台湾総督府専売局 1927年

杉本良 1932年

台湾総督府専売局 1936年

＊ 研究会報告 ＊

第 45 回 『中国・朝鮮の旧日本租界』研究会

中国・朝鮮の旧日本租界

日時：2014 年 7 月 18 日（金）15:00 ～ 17:30

場所：神奈川大学横浜キャンパス 21 号館 405 会議室

報告：田島 奈都子（青梅市立美術館 学芸員）

陳 雲蓮（英国ケンブリッジ大学ウルフソンカレッジ リサーチフェロー）

「中国民国期の商業ポスターの実態
—中国語表記のポスターは果たして 100%中国製
なのか？！—」

（田島奈都子）

1. はじめに：研究の発端

現在、民国期に製作された、中国服を着た人物を主題とした中国語表記の商業ポスターは、一般的に「中国製」と思われている。しかし、日本郵船や英米煙草は外国企業でありながら、上記の特徴を備えたポスターを製作しており、中国を代表する煙草会社である南洋兄弟煙草公司（以下、南洋煙草）のポスターは、立証できる作品は一部であるものの、大阪の日本精版印刷株式会社（以下、精版印刷会社）によって製作されたことが明らかになっている。要するに、上述の特徴を備えたポスターは、100%「中国製」とは限らないのである。

2. 日本の製版印刷業者にとっての中国

1910 年代半ば以降の日本企業は、第一次世界大戦の好景気を追い風として、本格的に中国に進出する傾向が強まり、それに同調するかのように、日本の製版印刷会社も中国を「新たな印刷市場」と見なし、関心を強めていった。実際、その様子は当時発行されていた印刷業界誌に、頻繁に中国に関する記事が掲載されたり、日本企業が依頼主となった中国語表記のポスターが現存していたり、日本の各製版印刷会社が製品やその見本として、「中国（語圏）向け」のポスター図案を発表したり、日本国内において「中国ポスター展」が各地で開催されていたことからよくわかる。

3. 精版印刷会社の中国での営業実態

大阪を本拠地とする精版印刷会社は、1907 年頃に南洋煙草と知遇を得て以来、上海への進出を加速させ、1929 年に発行された『精版印刷会社ノ概況』によると、同社の中国における取引先には、南洋煙草を筆頭とする中国各地の煙草会社に加え、中国に進出した欧米企業が多数含まれ、収益の 5 分の 2 は中国で上げていた。

精版印刷の強みは、ポスターに代表される高級な平版印刷を美しく仕上げられる点にあり、それを支えていたのは、最新の機械を導入した広大な上海工場に加え、1916 年に同社が実施した「第 2 回広告画面案懸賞募集」において、上海出身の周柏生を 3 等 1 席の入賞者として迎えられたことであった。なぜなら、中国における需要に的確に对应していくためには、「中国（語圏）向け」ポスターを専門に描ける中国人図案家が必要不可欠であり、実際、周は懸賞入選後に南洋煙草のポスターを筆頭に、数多くの中国国内外の企業のポスターを手がけ、その製版印刷を請け負っていたのが精版印刷会社であったことを考えると、両者は懸賞募集を契機に持ちつ持たれつの関係になったと推察される。

また、精版印刷会社は 1910 年代後半に中国政府の要請を受けるかたちで、中国人研修生を大阪工場に受け入れ、最新の製版印刷術の技術習得につとめており、1920 年代後半の同社上海工場で働いていた職工の 6 分の 5 は中国人であったとのことであるから、同社で技術や知識を身につけた中国人もかなりの数に上ったと思われる。

4. 結論

民国期に製作された、中国服を着た人物を主題とする中国語表記の商業ポスターが、「中国（語圏）向け」に製作されたものであることは確かである。しかし、これ

まで紹介したいいくつかの事例を総合すると、上記 2 点の特徴だけで 100%「中国製」とするのは早計であろうし、表面に現れているか否かに拘わらず、中国のポスターの発達を考える際には、同時代の日本の製版印刷業者の存在や彼らの手がけた作品についても、合わせて考慮すべきと思われる。

戦前期の外国における日本の製版印刷業の活動実態については未解明の部分が多く、今後は現地の研究者の協力も得ながら調査研究を進めると共に、同時期に製作された日本と中国のポスターを見比べることで、デザイン的な相違や影響関係についても考察を深めていきたいと考えている。

集落から都市へ：近代上海の都市形成原理

（陳雲蓮）

本報告は、陳雲蓮による近代上海の都市形成史研究の新しい成果の一部に基づき行われたものである。

従来、上海の外国租界となった地区は、沼地、低湿地、墓地という通説が定着しているが、それは租界当局、様々なメディアと先行研究が、1843 年上海開港以前の同地区の空間特性、及びその中で営まれていた中国人の生活実態を詳しくかつ丁寧に検証していないことから生じた誤解である。

上海外国租界の都市形成について都市・建築史学の立場から改めて考えるため、筆者は主にイギリス陸軍省作成の 1840 年代から 1940 年代までの上海と江南地域の実測調査地図集、19 世紀半ばに、上海、浙江省、江蘇省等で植物探検をしていたイギリス人の植物学者や、中国の貿易港（広東、廈門、福州、上海、寧波）に赴任してきた領事官たちの記録により、上海と江南地域に存在していた水路と集落の実態、及び長年の中国人農耕社会を支えた汚物再利用のシステムとその意義について分析した。その上で、1843 年以降、イギリス人が主導した上海租界の道路、土地と下水道整備の過程を究明し、旧来の水路と集落が近代の都市開発の中で果たした役割を明らかにした。要約すると下記の三点となる。

第一に、清末時代から続いた上海県城と周辺、及び外国租界となった地域の水路は、本来の清朝政府官僚または民間人により整備されたものが多く、農業灌漑、漁業、交通の機能を持っていたことが明らかとなった。更に、小さな水路は必ず大きな蘇州河や黄浦江へと通じる傾向

にあったため、それら水路の流れや河底の土堆積などはすべて黄浦江の流れや潮に左右された。水路の流れや潮は後にイギリス人が整備した「潮力下水道」の決定的な要素となった。

一方、旧来の汚物処理方法に関し、地方官僚や地主の出資で中国人はヨーロッパ人が「無駄」と思われた住民の糞尿と生ゴミすべてを拾い、タウンから発する特定の地上水路又は排水路を経由させ、郊外の農地近くに収集し、肥料として加工した後、一番高い値段を提示する集落に販売する。しかし、水路、集落と汚物処理の社会システムが、1840 年代からのイギリス人主導の近代都市開発により、実質上の解体の運命を迎えた。

第二に、道路と土地整備に関し、イギリス人は全体的な計画図もなく、旧来の中国人集落に存在していた水路、フットパスを足がかりに、水路を埋め立て、水路沿いのフットパスと一緒に租界の新道路に充てた結果、上海イギリス租界の主要街路網は、旧来の水路網を吸収して出来上がった。既存の水路網をそのまま近代都市の道路として整備した事実は、近代都市の形成原理及び都市拡張の根本的な要因であったことを意味する。一方、イギリス人商人は公道が整備される以前に、水路やフットパス沿いの土地をまず中国人地主から借り上げ、土地開発を行った。それが原因で、初期イギリス租界の道路交通状況が常に混雑を極め、道路整備が土地開発を後追いする形で行われた。

第三に、下水道整備に関し、イギリス人は旧来の中国人によるゴミと汚物処理方法をまったく学習しないまま、イギリス国内の下水道システムを導入した。黄浦江、蘇州河と洋涇浜が海に通じているため、河に繋がる潮力排水管を道路の下に埋設し、潮力で排水管内の汚物を排出し、そのまま河に放流しようと工部局は意図した。しかし、潮力はあくまでも気まぐれな自然要素であり、租界内の汚物を全部海まで流すことが出来ず、結局、中国人労働者が雇われ河岸に堆積したゴミや汚物を清掃することになった。一方、予想外の強い高潮の場合は、地中に埋まっていた排水管が破裂し、道路が陥没したケースもみられた。下水道の欠陥が後の都市衛生問題にまで発展した。

以上のことから、今日の大都市上海の基盤となる上海租界が、旧来の水路、集落を基礎として発展したことを実証的に証明することができた。上海はまさに水路と街路が複層化した都市なのである。

全国外国人居留地研究会横浜大会実行委員会 主催 (横浜外国人居留地研究会 / 神奈川大学非文字資料研究センター租界班) 第 7 回外国人居留地研究会 2014 全国大会

横浜大会 開国 160 周年 日本近代化の扉を開く

日 時：2014 年 10 月 4 日（土）・5 日（日）
（※シンポジウムは 10 月 5 日午前）
会 場：横浜市開港記念会館

シンポジウム「租界と居留地—都市と建築の視点から—」

報告：大里浩秋（非文字資料研究センター 研究員）
内田青蔵（非文字資料研究センター長）
孫 安石（非文字資料研究センター 研究員）
青木祐介（横浜都市発展記念館 主任調査研究員）



はじめに

大里 浩秋

一昨年（2012 年）から横浜外国人居留地研究会を中心に準備してきた「第 7 回外国人居留地研究会 2014 全国大会横浜大会」が、私たち租界班も参加・協力して 10 月 4、5 日両日に実施された。

この大会を取材してそこでの内容を要領よく紹介している熊谷和夫記者の文が『神奈川新聞』（10 月 6 日付）に載ったので、その一部を引用させていただくと次のようである。「日本近代化の扉を開いた開港の地の歴史を探る外国人居留地研究会全国大会（実行委主催）が 4、5 日、横浜市開港記念会館（同市中区）で開かれた。日米和親条約による開国から 160 周年、横浜開港から 155 周年を迎えた今年は、横浜をはじめ神戸、長崎、函館など全国の開港場、外国人居留地の研究者ら延べ約 320 名が参加。5 日は中国での日本租界の歴史に光を当て、日本の近現代史を振り返った。」



租界班としては、横浜外国人居留地研究会会長の斎藤多喜夫さんと

相談して、この大会の主催者に名を連ねるとともに、表題のシンポジウムも全面的に協力することにして、当日を迎えた。報告者氏名と報告のタイトルは、報告順に以下の通りである。

大里浩秋「中国における日本租界がたどった道」
内田青蔵「横浜居留地の初期洋風建築について」
孫安石「上海港湾研究—水先案内人（PILOT）協会を事例として」
青木祐介「横浜外国人居留地と赤煉瓦—近代遺跡調査の成果から—」

なお、大会用パンフレットにはシンポジウムの狙いを次のように記した。「タイトルからおわかりいただけたと思いますが、シンポジウムは、かつて中国に置かれた日本の租界と横浜に置かれた外国人居留地について、主に都市と建築の視点から四人が報告し、その後参加の皆さんと質疑応答することで、近代日本に存在した租界と居留地の歴史を比較しつつ、それらが存在した意味についてふりかえる機会にしたいと考えています。」

この狙い通り、4 人の報告後、各地居留地研究会会員や横浜の華僑の方から質問・感想が出されて、活発な討論が行われた。租界班としては、今回の横浜外国人居留地研究会との協力の経験を踏まえ、今後とも研究・交流を深めていきたいと願っている。

以下に 4 人の報告内容を紹介するが、大里については、再度『神奈川新聞』の記事を引用させていただくことにし、大里以外の内容についてはそれぞれの報告者に書いてもらうこととする。

「神奈川大学の大里浩秋教授（中国近現代史）が中国における日本租界の歴史を報告。

約 40 年かけ 1899 年に治外法権（領事裁判権）と外国人居留地の撤廃を実現した日本が、中国では西洋列強を後追いつ、杭州（97 年）、蘇州（同）、天津（98 年）、漢口（同）などに日本租界を設置し、その後も特権、権益の獲得に力を入れていった経緯を説明。欧米列強の中国侵略史を後追いつたばかりか、さらに突き進んで一層侵略に向かってしまった、と指摘した。」少しだけ付け加えるなら、大里はまとめとして、日本が中国に租界を置いた大義名分として、西洋列強の中国・朝鮮・日本への侵略を防ぐために、日本を中心として団結する必要がある、また日本には中国の領土を守る責任があり（支那保全）、さらに日本にしかその責任は果たせないという考えを持つ日本人がかなりいて、彼らはそうした主観的思考に基づいて、中国に対する日本の行動を合理化し、逆に中国側の排日行為は日本の意図を何もわかっていないと批判する傾向があったのではないかと述べた。

横浜居留地の初期洋風建築について—屠牛場に関する一考察—

内田 青蔵

はじめに

横浜を会場に開催される「居留地研究会」を神奈川大学非文字資料研究センターが共催することになり、租界研究班のひとりとして研究報告の機会が与えられた。筆者の専門は、近代日本建築史であり、横浜ではとりわけ幕末・明治初期の建築に関心がある。そこで、今回は、非文字資料としての古地図・古写真などを用いながら、これまでほとんど取り上げられてこなかった初期洋風建築として横浜に設けられた最初の屠牛場について報告した。以下、その概要を記したい。

1864（元治元）年締結の「横浜居留地覚書」の内容とその後の動き

横浜に外国人居留地が設置され、外国人の居住が始まると、日本と諸外国との間で土地利用に関する規定が結ばれた。最初の第 1 回地所規則は、1860（万延元）

年のもので、日本側が居留地内道路と波止場を整頓し、必要に応じて下水道を設けることが定められた。続いて、日本側の整備の不備の問題があり、1864（元治元）年に第 2 回地所規則が定められた。その後、居留地で火事がおこり、1866（慶応 2）年に居留地内の防火対策を盛り込んだ第 3 回の地所規則が新たに結ばれた。

こうした規則の中で、第 2 回地所規則である「横浜居留地覚書」（以下「覚書」と記す）の中で、外国人の日常生活に係る施設である競馬所、病院、墓地などとともに屠牛場の設置が謳われた。そこでは、「外国人のみならず、恐らく日本人の為にも、健康を破るべき害を避んとして、屠牛舎を造営せんが為、海岸に於て一箇の場所を示し置き、故に兼て差出し置ける図面通りに緊要の舎屋を、延引する事なく日本政府にて造営せらるべきを今約定せり。」（『横浜市史稿 政治編二』より）と記されており、屠牛場は外国人だけではなく日本人の為にも必要な施設として、その施設の設置を求めていることが分かる。そして、外国側では、場所を選定し、施設に必要な建築図面も提示していたことが分かる。

屠牛場の建設と「屠牛場規則」

1865（慶応元）年 5 月 26 日、幕府は諸外国と「屠牛場規則」を結んだ。その第 7 条では「千八百六十五年第六月十七日より或ハ其後より、公ケナル屠牛場ノ外、当居留地内ニテ獸類ヲ屠ル事ヲ止メ、ソヲ厳ニ禁ズベキ事」とあり、1865 年 5 月には施設は完成し、6 月 17 日から使用できていたことが分かる。

なお、この屠牛場については『横浜市史稿 政治編二』（以下『政治編』）および『横浜市史稿 風俗編』（以下『風俗編』）に詳細な記述が見られる。すなわち、建設時期は「慶応元年五月」、建設地は「北方村字小港」で、施設の貸出にあたっては、敷地 580 坪を 5 つに区分し、イギリス・フランス・アメリカ・オランダ・プロシャ（ドイツ）の 5 ケ国に貸し出したという（『風俗編』）。建設地「北方村字小港」は、188 番で英国海軍病院と本牧十二天社の間に位置し、千代崎川河口の入口の敷地であった。なお、『政治編』および『風俗編』には、その後の屠



牛場についても触れられているが、その記載内容が異なり、『政治編』では1874（明治7）年に移転が予定されたが、中止されそのまま屠牛場は廃止されたという。一方、『風俗編』では移転したが、1882（明治15）年頃には移転先で閉鎖したと記されているのである。

また、当時の古地図を見ると、管見によれば1898（明治31）年の倉田太一郎製作の「新選横浜全図」には、まだ当初の場所に「屠牛場」の文字の記載が見られ、この公設屠牛場の閉鎖時期に関しては、今後の課題である。

屠牛場建築の概要

屠牛場に関しては、『THE FAR EAST』（1870年12月16日発行）に写真と簡単な記事「THE BUTCHERIES, HOMOCO」が掲載されている。記事には建物の記述はなく、施設は外国人の求めた建物で「建物以外に大きな敷石の広場、家畜用の囲い、牛舎群があり、いつでも屠牛ができた」という。写真では建物の背後が砂浜で、平屋の寄棟瓦葺きの建物、そして細長い建物がそれに続いている様子が確認される。建物の窓形状は縦長で、洋風意匠の建物であったことが推測される。

また、先の1875（明治8）年のドイツ所有の屠牛場の取壊しに関する記事によれば、建物の詳しい情報が見られる。すなわち、ドイツの屠牛場の建物は7棟で、それぞれ「外国人住居」1棟（寄棟棧瓦葺き、下見板貼り）、「小使部屋」1棟（切妻棧瓦葺き、下見板貼り）、「納屋」1棟（切妻棧瓦葺き、下見板貼り）、「蒸焼所煎燂所共」1棟（切妻棧瓦葺き、三方石積一方開け放し）、「豕飼置所」1棟（切妻屋根、下見板貼り）、「牛飼置所」1棟（切妻屋根板葺き、廻り開け放し）、「雪隠」1棟（切妻屋根、下見板貼り）であった。

また、各建物の屋根に注目すると、「外国人住居」だけが寄棟屋根で、他はすべて切妻屋根であった。また、「外国人住居」の外壁は、縦長窓で下見板貼りであることから、いわゆるアメリカ系の下見板貼りの建物であった可能性が考えられる。なお、本稿の作成にあたって、斎藤多喜男氏から資料の提供と様々なご教授を得た。ここに記して感謝したい。



『THE FAR EAST』（1870年12月16日発行）掲載写真およびその拡大写真

上海港湾研究—水先案内人（PILOT）協会を事例として

孫 安石

日本と東アジアの居留地を取り上げた優れた研究業績の一つは、加藤祐三編『横浜と上海—近代都市形成史比較研究—』（1995年）であった。その後、中国大陸においても特に上海を中心とした都市研究が活発化し、近年では上海社会科学院の「歴史研究所」と復旦大学の「上海史国際研究中心」等が中心となり、中国のその他の開港場が置かれた都市（天津、武漢、青島、重慶など）を横に繋げる共同研究が模索されつつある。このような動きに韓国の仁川、釜山、木浦などが加われば、近い将来には東アジアの開港場や居留地をめぐる共同研究やシンポジウムなどが可能ではないか、と大いに期待している。ところが、従来の中国の開港場・居留地研究の中心は、「陸上」の租界の運営と中国人社会などとの関係が取り上げられる場合が多く、「海上」（河川）の港湾施設の建設と運営、汽船会社と航路関係などについては未開拓の分野が多い。そこで、今回は日本側が保有している上海の港湾関係の資料の一部を紹介した上で、上海の「水先案内人協会」を取り上げ、組織の成立と業務内容、そして、戦争との関連について紹介したい。

日本側が保有する中国の港湾関係の資料

明治維新以降の日本では、1869年7月に兵部省による近代的な水路の測定事業が開始され、1893年には中国の沿岸部を範囲にいた『寰瀛水路誌』3巻が完成した。その後、1886年には「海軍水路部」が水路の測量を継続し、1920年には「水路部令」が發布され、水路の測量、海上の観測、水路図誌、航海保安に関する事項などについて詳細な調査が実施された。『日本水路誌』、『東洋灯台表』、『観象雑誌』、『測量報告』、『海路諸標便覧表』、『航路標識便覧表』などの報告や雑誌は、19世紀の中ごろから日本が取り組んできた水路と航海、港湾などに関する調査の成果であるといえる。

ところが、日本側にはその他に外務省外交史料館が中国の港湾関係の資料を保有している。例えば、中国の水先案内人についても「各国水先案内関係雑件・支那の部（F-1-7-0-2-1）」「各国水先案内関係雑件・支那の部・水先権回収問題（F-1-7-0-2-1-1）」、「本邦水先案内関係雑件（F-1-7-0-5）」などの資料が現存している。

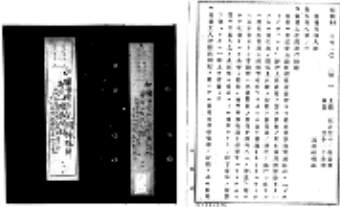
上海港の水先案内人

上海港は近代中国の他の開港場と同じように海関と港務局の管理下に置かれ、港内の錨地は商用、危険物積載船舶用、軍艦用などに分かれ、各船舶の運航はそれぞれ航行規定により厳しく制限された。上海港の安全な出入りを確保するために水先案内人が置かれる根拠は、1843年7月22日の英・清五港通商章程第1条で、船舶は入港出港の際、水先案内人を雇用し、案内料は当該港における英国領事が決定する、という条項に求められる。その後、総税務司のハートにより1867年、「水先案内に関する総章」（General Regulation for the Chinese Pilotage Services）が制定され、1868年11月には清朝政府の外務省に当たる総理衙門の批准を経て、地方の各省に公布された。上海港の水先案内人に関する章程は1873年に制定された。

このように19世紀末から外国の船舶が上海港に入港するには「上海水先案内人協会」（The Licensed Pilot Association）に所属する水先案内人を雇うことが義務づけられたが、中でもイギリスは最も大きな影響力を行使していた。水先案内人が使用する船舶は「領江公司」（Shanghai Pilot Boat Co.Ltd）が所有するもので、一人の水先案内人を推薦するためには同社の株主になる必要があったという。その結果、長い間、上海の水先案内人はイギリス人が独占することになった。例えば、1917年の揚子江水先案内人は合計33名であったが、その内訳が、英国人23名、フランス人3名、ドイツ人4名、ノルウェー人1名、デンマーク人1名、アメリカ人1名であったことを見ても、その不均衡さがよくわかる。中国人の水先案内人の加入



が認められたのは、南京国民政府が樹立した後の1928年になってからのことであった。



外務省外交史料館の資料
（左—「中国港湾修築関係雑件・黄浦口改修問題」、請求番号：B-G-1-2-0-2-2）、右—「各国水先案内関係雑件」請求番号：B-F-1-7-0-2-1）より

水先案内人と戦争

ところが、1941年末に勃発した太平洋戦争は、上海の水先案内人の組織を根底からひっくり返すものであった。まず、「上海水先案内人協会」は日本の帝国海軍の管理下に置かれ、「領江公司」はイギリス籍の敵性会社であることを理由に、軍の管理下に置かれ、水先案内船の長江丸と黄浦丸は帝国海軍に拿捕された。そして、1941年12月8日以降には、上海港全部の港湾事務が大日本帝国海軍の管理下におかれることになった。敵性国家の水先案内人は徹底的に排除された。また、中国人水先案内人は「帝国海軍の命令に服従すること、軍紀を厳守すること」を宣誓した後、服務が認められた、という。戦局が厳しくなるにつれ、水先案内人の仕事内容は軍の機密保持を理由にさらに厳しく統制され、1943年5月には「上海港水先協会」と「揚子江水先協会」を統括する形で「中支水先協会」が創立された。当時の記録によれば、水先人の総計は71名。その中に中国人は10名、残りは全員が日本人であった。

以上、外務省外交史料館が保有する中国港湾関連の資料を紹介し、実例として水先案内人協会を取り上げ、その成立と業務内容、そして、日本との関連について若干、紹介してきた。今後は、上海の港湾研究と密接な関連がある浚渫、燃料、船舶、気候、流行病などの分野にも目配りする必要がある。

横浜外国人居留地と赤煉瓦 —近代遺跡調査の成果から—

青木 祐介

関東大震災によって旧外国人居留地の建物の大半が失われた横浜では、近年、建設工事などの機会に、かつての居留地建築の遺構が発見される機会が増えている。本報告では、外国人居留地の街並みを特徴づけていた煉瓦造建築について、その材料である赤煉瓦を素材として取り上げ、近年の近代遺跡調査の成果をもと

に、赤煉瓦研究の現状と今後の課題を指摘した。

日本における赤煉瓦製造史の最初期において、官営工場、すなわち横須賀製鉄所（慶応2年）や富岡製糸場（明治5年）などの建設過程で、外国人技術者が煉瓦製造を指導したことはよく知られている。しかし、それら初期の事例は、あくまで目的とする工場建設のために現地で生産・調達したものであり、煉瓦造建築の普及を都市の広がりの中で捉えるためには、煉瓦の製造だけでなく、流通の問題も視野に入れなければならない。

横浜外国人居留地では、明治11年開業のドイツ海軍病院（山手居留地40番地）を写した着色写真に煉瓦造の病棟が確認できるほか、明治14～20年におこなわれた居留地一帯の下水道整備で導入された赤煉瓦の卵形管は、現在でも各所で実物が発見されている。これらの事例から、外国人居留地における赤煉瓦の普及は、明治10年代を発端とすることが想像できるものの、その状況の解明には、モノとしての煉瓦とその製造者に関する記録の両面からアプローチする必要がある。

横浜市域でどのように煉瓦製造業が成立し、展開していったのか。現時点でまとまった研究はないものの、『横浜市統計書』『工場通覧』などの記録から、明治中期から後期にかけての概況は把握することができる。それらの統計データから見えてくるのは、多摩川・鶴見川といった河川の流域に、中小規模の煉瓦工場が展開していた状況である。

そのなかから本報告では、多摩川流域にあった御幸煉瓦製造所について紹介した。同製造所は、元は明治21年に横浜煉化製造会社として創業し、多摩川流域の橘樹郡戸手村（現・川崎市幸区）に円形のホフマン窯を備えた工場を設けていたことが、当時の新聞記事や各種文献から知られている。創業後まもない同26年にいったん解散するが、のちに御幸煉瓦製造所と改称して増山家による個人経営として再出発し、関東大震災で被災するまで操業を続けていたとされる。

横浜煉化製造会社の新聞広告に掲載されたマークか



御幸煉瓦製造所『神奈川県橘樹郡案内記』（1914年）より

ら、同社の煉瓦は放射状の特徴的な刻印をもっていたことが知られるが、御幸煉瓦製造所時代には分銅印の刻印を使用していたことが、川崎市市民ミュージアムの調査により判明した（『産業都市・カワサキのあゆみ100年』川崎市市民ミュージアム）。それまで分銅印の刻印は、東京の小菅集治監（現・東京拘置所）で製造された煉瓦だとされていたが、東京での同刻印の採集事例がないことから、その製造所については疑問が呈されていた（『地中に眠る都市の記憶』横浜都市発展記念館）。同ミュージアムの調査では、御幸煉瓦製造所の創業者宅の敷地内から、焼成に失敗して振れた状態の煉瓦が多数出土しており、その多くに分銅印の刻印が認められた。

放射状、分銅印ともに、これまで横浜市域で多く確認されてきた煉瓦の刻印であるが、そのことをより定量的に示す事例として、平成19～20年におこなわれた山下居留地遺跡の発掘調査がある。この発掘調査では、かつての外国人居留地48番地・54番地・55番地に所在した外国商館の遺構だけでなく、道路や下水道など居留地の都市インフラの遺構も確認されるなど、居留地研究において大きな意義をもたらした。

本報告では、膨大な出土遺物のなかから赤煉瓦の情報抽出し、記載されている4,736点の赤煉瓦の「刻印集計表」をもとに、上記の横浜煉化、御幸煉瓦のものとする放射状、分銅印の刻印について確認したところ、両刻印の数はあわせて2,596点にもおよび、その数は刻印入りの手抜き成形煉瓦（機械成形ではなく職人の手作業によるもの）2,920点のおよそ9割（89%）を占めることが判明した。

あくまで限られた地点での調査成果であるとはいえ、それまで突発的に工事現場で採集された煉瓦の情報に比べて、発掘調査から得られるデータは一定度の「定量分析」を可能にするものであり、その信頼性は高い。外国人居留地が発展していく過程でつくられていった、赤煉瓦の華やかな街並みを支えていたのは、多摩川・鶴見川などの流域にある中小規模の煉瓦工場であったことを示唆する重要な成果だといえるであろう。今後、こうした出土地点と刻印とを組み合わせたデータが蓄積されることで、より緻密な分析が可能になることを期待したい。



※写真撮影 幸山義紀

寄贈図書 月刊『高雄日僑会誌』について

先に絵葉書を始めとする中国天津に関する資料を多数寄贈してくださった近藤恒弘さんから、今回は台湾高雄在住の日本人で組織する日僑協会高雄支部が発行する月刊『高雄日僑会誌』を寄贈していただいた。確認を取るに至っていないが、創刊号の発行は1974年1月と思われ、同年5月発行の第5号から1995年9月号まで（そのうち、1975年から1994年まではほぼ全号）の計215冊を頂戴した。近藤さんのお話では、今でも発行されているのではないかとのこと。

同時に、『高雄日本人学校創立十周年記念誌』を含む同学校の出版物を数点いただいた。海外各地で働き生活する日本人が発行している雑誌類は多数に上るはずであるが、そうした現地の活動記録を活用する機会を探りたいものである。（大里浩秋記）

高雄日僑会誌を寄贈するにあたって

近藤 恒弘（民間収集家）

私は38歳の時に台湾に渡り、30年ほど台湾に居住しましたが、最初は高雄にある米国企業に単身赴任での勤務でしたので、高雄の日本人会には入会していませんでした。その後、一、二年遊んだとしても息子たちに海外生活の経験をさせることが将来の為になるのではと考え、家族を高雄に呼び寄せることにしました。

当時の高雄日本人学校は、小学一年から中学三年までを合わせても、総勢三十数名という少人数の学校で、長男が編入した中学二年の学生数はわずかに二名でしたし、次男が編入した中学一年の学生数は三、四名、三男が編入した小学五年の生徒数は五、六名という寺子屋状態でした。日本人学校に入るには日本人会への加入が必須条件でしたので、日本人会に入会を致しました。

その当時、私が日本人と付き合うのは日本人学校の運動会くらいだったのですが、生徒数が少ないので父兄の競技が多くありました。競技ごとに参加者を募っており、参加者が少ない競技には参加するよう声をかけられ、午前中だけでも六、七種目に参加するような状態でした。賞品は日本企業からの寄付によるもので、参加するごとに商品を買ったので、午後の部は参加を遠慮するような状態でした。息子たちは大喜びでしたが、友達の中には賞品を一つも貰えず寂しそうな様子をしている子もありました。

私は米国企業に勤務しておりましたので、日本人との付き合いは殆どなかったのですが、日本人会へ入会しゴルフクラブに入会したことで段々と日本人居留者との付き合いが増えていきました。また、日本人会に入会したことによって、毎月、「日僑会誌」が送られて来るようになりました。暫くして日系企業に職を変え、嘉義に住むようになりましたが、引き続き高雄の日本人会の会員として籍を置いておりました。最初の頃は日本人会誌を集める気はなかったのですが、日本人倶楽部に行きますとバックナンバーが置かれており、それらを自由に持ち帰ることが出来たことと、だんだんと古いものがなくなってきていたことから収集癖が頭を持ち上げてきて、これらの収集を始めることとなりました。海外での日本人倶楽部の会誌は発行部数が少なく、また在留日本人の生活や活動が記されているので研究機関に寄贈する価値があるのではと思い、台湾を離れるまでの間に配布された日本人会誌を集め、日本に持ち帰りました。日本人会の部会は、経済委員会、文化厚生委員会、学校運営委員会、日本人倶楽部運営委員会、幼稚園部会、日本人会誌運営委員会、婦人会等があり、委員の任期は一年でした。また日本人会の会員数は当初四、五百人くらいでしたが、最終的には千人を超したように記憶しております。

私は66歳までは台湾におりましたが、その後は中国の広東省に行き色々な企業のコンサルタント的な仕事を73歳までやってから、仕事を打ち切り日本に引き揚げました。

この度は、神奈川大学非文字資料研究センターで「日僑会誌」を引き取っていただけるということですので、寄贈させていただいた次第です。



1974年5月号

研究調査報告

海外神社跡地のその後

韓国濟州島の海外神社跡地調査報告

渡邊 奈津子

(非文字資料研究センター 研究協力者)

2014年2月5日から7日、韓国濟州島の海外神社跡地13社の調査を行った。

同行者は、中島三千男（非文字資料研究センター研究員）、沈癸昊（濟州国際大学教授）、金泰順（日本常民文化研究所特別研究員）、諸葛衍（大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程在学）の4人である。

調査結果は表1の通りで、13社の跡地を確認した。濟州島には『神道史大辞典』（園田稔・橋本政宣編、2004年、吉川弘文館）巻末付表、佐藤弘毅「終戦前の海外神社一覧」によれば、12社の神明神祠と楸子面に神祠が1社建てられたことが分かるが、『大陸神社大観』（嵯峨井建復刻監修、2005年、ゆまに書房）から、旧左面には2社の神明神祠が建てられ、合わせると濟州島には14社が創建されたことが分かった。楸子面の神祠は船で移動する必要がある、調査日数の関係から今調査では対象としていない。以下、調査順に報告する。

涯月面神明神祠：現在は涯月邑の保健所が建っており、敷地入口と敷地周りに松の木が植わっている。神祠が

あった当時、東隣に小さな保健所と学校が建てられていたが、光復後、保健所が神祠跡地に、学校は神祠跡地の西隣に移動した。

翰林面神明神祠：現在は翰林教会の敷地が建つ敷地内の碑に、別の場所にあった教会の「旧聖殿」が1945年7月6日、アメリカ軍の空襲により爆破され、1946年12月12日、「前日本国神社基地上」に「聖殿定礎新築」した旨が刻まれている。鐘と聖殿には神祠の礎石が使用された。

大静面神明神祠：現在は山林となっており、墓地がある。遺構は見つからなかった。付近には日中戦争期に関東第58軍団が駐屯し、飛行場が存在したこと、また濟州邑に建てられた神祠に続き2番目に大きな神祠であったという証言を得た。

安德面神明神祠：跡地は民家が建つ小さな広場のような芝地になっている。付近に住む「アマテラス」という言葉覚えておられた男性によれば、現在南側には安德初等学校があるが、神祠があった当時は尋常小学校であったという。西側には小高い山が見え、南側の町を見下ろ

せる見晴らしの良い場所だった。

中文面神明神祠：跡地には現在、中文教会が建っている。教会の建物は坂を上がった先に建ち、西隣に保健所が建っている。教会建物と保健所に挟まれた道が参道であり、鳥居が建てられていたという。教会建物の北面は駐車場と、駐車場を囲んで修女院や倉庫など建物が建っているが、修女院と倉庫の間辺に社殿があったとのことである。駐車場と教会の周りには、松の木が数本植わっていた。

朝天面神明神祠：現在社殿跡地には、農協のスーパーマーケットが建てられている。朝天里の敬老堂老人会長である男性から、当時は参道の両側に広場があり、桜並木や松の木、鳥居、灯籠があったという証言を得られた。広場では光復後、五日市が開かれ、現在は駐車場になっている。

旧左面神明神祠（現 金寧里）：現在は金寧中学校が建つ。社殿跡には校舎が建ち、その建物に向かって参道であったとされる長く真っ直ぐな道が残る。当時は参道を挟んで松並木があったというが、現在でも松の木がその道の両側に植わっている。

旧左面神明神祠（現 細花里）：ここでは、話者から情報を得ることができなかったが、跡地は青年団の建物が建てられているところで、工事中であった。小高く町を見渡せるような場所で、建物裏手は海に面している。

城山面神明神祠：現在、観光地として賑わう城山日出峰に建てられたという。跡地と見られる広々とした芝地には、ホテルが建設されたとのことだが、今は何も建てられていない。海からほど近く、城山がそびえる。

表善面神明神祠：話者によると、現在表善中学校が建つ場所の、近くの芝地が跡地とされる。中学校が見える場所で、道に面しているが、当時はその場所に川が流れていたとのことである。

南元面神明神祠：西帰浦市の南元中学校が建っている。校舎建物近くにある小高くなっている林が跡地とのことだった。その場所に行くための道は松並木であった。ここに建てられたのは奉安殿であったという可能性もある。

西帰面神明神祠：現在は、西帰浦市の西帰浦気象台が建っている。南には海が広がり、海に面した道路から北へ当時は参道であった急な階段を上がった先に建っていたとされる。大変見晴らしのいい場所であった。

濟州邑神明神祠：濟州邑神明神祠は設立許可が濟州島内で最も早い時期のものである。光復後に建てられた濟州中央協会の跡地で、濟州道中央気象庁の新庁舎を建設するために現在は発掘調査中であった。急な階段や坂を上った先の場所で、町を一望できる。階段を下りた先は交通量の多い道路に面し、河川が流れている。

以上、濟州島の海外神社は、その多くが島の海岸線沿いの道路からほど近い、小高い場所に建てられたようだということが分かった。そのような場所は、調査中度々耳にした「いい場所」であったと思われる。町を見渡せ、気象台が建つような、「いい場所」が押さえられたのだろう。ジンジャオカという呼び名が各地で複数の話者から聞いたことも興味深い。また、当時学校の近くに建てられた神祠は現在も学校敷地やその付近の土地であったりするのだが、跡地に教会や保健所が建てられるという特徴を見ることができた。

本稿では、海外神社跡地の現在を中心に状況を報告するにとどめたが、今回の調査では、各地で神祠があった当時や光復後の跡地の変遷について、話者をはじめ調査地の方々のご協力のもと、貴重な証言を得ることができた。この成果は、年報『非文字資料研究』第11号で報告する予定である。

最後に、今回、現地で同行してくださった濟州国際大学の沈揆昊教授が、調査中だけでなく、綿密に事前調査や話者との交渉等の下準備をしてくださったことで、限られた時間の中で非常に速やかに島内全ての神祠跡地を巡ることができた。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

表1 濟州島調査海外神社一覧（設立許可年順）

	旧支配地名	神社名	旧鎮座地	現在地	社格	設立許可年	祭神	現況
1	全羅南道濟州島	濟州邑神明神祠	濟州邑	濟州市	神明神祠	1931（昭和6）年12月1日	天照大神	濟州道中央気象庁新庁舎建設予定地(発掘調査中)
2	〃	旧左面神明神祠	旧左面	旧左邑金寧里	神明神祠	1939（昭和14）年2月	天照大神、明治天皇	金寧中学校
3	〃	旧左面神明神祠	旧左面	旧左邑細花里	神明神祠	1939（昭和14）年2月	天照大神、明治天皇	青年団の建物（工事中）
4	〃	涯月面神明神祠	涯月面	涯月邑涯月里441－3	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	涯月邑保健所
5	〃	大静面神明神祠	大静面	大静邑上幕里	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	山林、墓地（小さな丘）
6	〃	安德面神明神祠	安德面	安德面和順里1150	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	民家、芝地
7	〃	中文面神明神祠	中文面	西帰浦市中文洞1498	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	中文教会、中文保健所
8	〃	朝天面神明神祠	朝天面	朝天邑朝天里新北路236－2	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	スーパーマーケット
9	〃	城山面神明神祠	城山面	城山日出峰	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	城山日出峰、広い芝地
10	〃	南元面神明神祠	南元面	西帰浦市南元邑	神明神祠	1939（昭和14）年2月25日	天照大神、明治天皇	南元中学校
11	〃	西帰面神明神祠	西帰面	西帰浦市	神明神祠	1939（昭和14）年3月22日	天照大神、明治天皇	西帰浦気象台
12	〃	表善面神明神祠	表善面	表善面表善路	神明神祠	1939（昭和14）年3月23日	天照大神、明治天皇	表善中学校
13	〃	翰林面神明神祠	翰林面	翰林邑翰林里1284	神明神祠	1939（昭和14）年3月4日	天照大神、明治天皇	翰林教会

※1 【神道史大辞典】（園田稔・橋本政宣編、2004年、吉川弘文館）巻末付表、佐藤弘毅「終戦前の海外神社一覧」をもとに作成。
※2 神社名は、津田良樹・中島三千男・金花子・川村武史「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道、和順郡を中心に—」（『年報 人類文化研究 COE プログラム研究推進会議』）に倣い、旧鎮座地に社格を組み合わせた。
※3 祭神は『大陸神社大観』（嵯峨井建復刻監修、2005年、ゆまに書房）による。また同書によれば、旧左面に建てられた2社の設立許可年（本書その翌日の25日となっているが、鎮座地が「旧左面」までしか判明しないためそれぞれ設立許可日を限定することができない）。

のための非文字資料の体系化』第3号、2006年3月、神奈川大学21世紀中では「創立」とされている）に関して、1社は2月24日、もう1社は

研究調査報告

海外神社跡地のその後

中国・華北(北京、天津、済南、煙台、青島)の神社跡地

稲宮 康人
(非文字資料研究センター 研究協力者)

2014年4月25日から5月6日まで中国・華北(北京、天津、済南、煙台、青島)の神社跡地の撮影・調査を行った。各都市の名を冠した神社跡地以外に天津稲荷神社跡地、済南の神社跡地、青島の台東鎮神社跡地に行った。以下各神社の概要を報告する。

北京神社 (写真1) 2014年4月26日

北京神社は、^{注1}「事变後、急速に居留民が増加したので、「われ等の北京神社」「日本帝国の宗旨としての神社」を熱望する声が、官民を通じて起った」という動きを受けて、1940(昭和15)年6月24日に北京の貢院(明清時代の科学試験場)跡に鎮座した(地図1)。中華民国に創建した神社だった為、日本の社格制度は適用されず、官国幣社の小社に準ずる神社として扱われた。

神社があった場所は、地下鉄建国門駅付近の胡同や社会科学院の敷地である。この胡同は取り壊しが進んでおり、胡同が壊された跡は廃物置場や建築作業員のプレハブ宿舎となっている。9月に再訪した際には、廃物置場がトタン塀で囲まれていた。神社の痕跡は何もない。胡同の住人の中には、この場所に神社があったことを知っている人もいた。

天津神社 (写真2) 2014年4月27日

北京の外港として発達した天津は1860年の北京条約によって開港し、義和団事件の後、列強各国が租界を設けた。天津神社は、大正天皇即位を記念して1920(大正9)年10月11日に天津日本租界の大和公園敷地内に創立された。1938(昭和13)年に社殿改築及び境内拡張を決め、1941(昭和16)年秋に竣工したようであるが、拡張後の神社については資料がなく詳細は不明である。鞍山道・山東路・新華路に挟まれた区画が大



地図1 最新北京交通圖から北京神社付近図(昭和15年11月7日発行)



写真1 北京神社跡。道(貢院東街)の右側は社会科学院の敷地。左側は貢院胡同



写真2 天津神社跡。写真右側にあるガソリンスタンドや赤い瓦屋根の建物辺りにあった



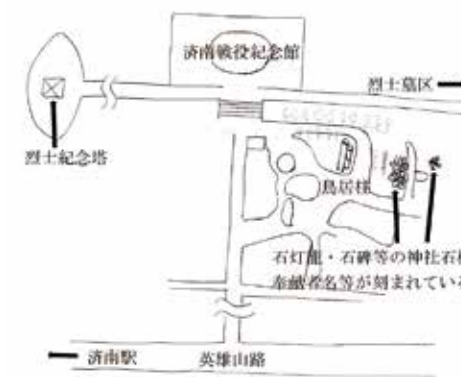
写真3 天津稲荷神社跡



写真4 済南神社跡。石灯笼の竿部分。「茨城縣筑波町 廣瀬○次 昭和十七年七月十七日」と刻まれている



写真5 奥の済南戦役記念館が建つ場所が本殿跡地と推測される



見取図1 済南神社跡見取図

和公園の跡地であり、八一礼堂や中国石油のガソリンスタンドがある。公園の南西部分にあった神社(拡張前)の跡地にはガソリンスタンドなどが建っている。神社の痕跡は何も残っていない。

天津稲荷神社 (写真3) 2014年4月27日

1926(大正15)年4月27日に創立した。万全道と山西路が交差する辺りにあったと思われ、現在は市街地になっている。当時の住所は「天津市伏見街5」だったので、京都・伏見の人達が移住した地区に故郷の稲荷を勧請したのかもしれない。現地の人はこの場所に神社があったことは知らないようだった。

済南神社 (写真4、5、6/見取図1) 2014年4月29日

済南は山東省の省都で膠済鉄道(青島-済南)と京滬鉄道(北京-上海)が交わる交通の要衝である。日本軍は、蒋介石率いる国民革命軍の張作霖への北伐再開を牽制する為、居留民保護を名目にして出兵(第二次山東出兵)した。1928(昭和3)年5月3日に済南で市街戦が起こり、8日には日中全面衝突へと発展した。日本軍は、多数の現地人を殺傷し、中国国民の対日感情を極度に悪化させることとなった(済南事件)。更にこれに乗じて増派した兵力を山東省から華北全域に展開させた(第三次山東出兵)が、内外の批判を受け翌年には撤兵することとなった。

済南神社は市の郊外にある梁家庄(現・英雄山)に創建された。資料は発見できていないが、中国版 google の baidu.com で地名+神社で検索し、場所を特定した。設立許可が1941(昭和16)年、残された石灯笼等に刻まれた年号から1942(昭和17)年7月に鎮座したと思われる。境内地は済南革命烈士陵园となっている。神社の本殿があったと思われる場所には、国共内戦における共産党の勝利を記念した済南戦役記念館が建っている。神社の鳥居、灯笼、石碑などに使用された石材が公園の一画にまとめて置かれている。石材を撮り終わった後、記念館を正面から撮影しようとしたところ、警備員に制止され、それ以降の撮影は難しくなった。軍が管理している建物では、三脚を使った撮影は制止されることが多い。

公園の片隅に無雑作に積まれた石材は、第二次アヘン

戦争時に英仏軍によって破壊された離宮をそのまま保存している北京の円明園と同じように、外国による侵略の痕跡をあえて残し、人民に晒しているようにも見えた。

神社 (写真 A) 2014 年 4 月 29 日

济南市内の中山公園の説明版に、「日本軍占領後ここに神社などが建てられた」(大意)との記載があった。どうい神社だったのか資料がないため判らないが、祠のようなものだったのではないだろうか。

芝罘 (チーフー) 神社 (写真 7、8) 2014 年 5 月 1 日

山東半島北部に位置する芝罘(現・煙台市)は、1858(安政 5)年の天津条約で開港し、貿易港として発展した。渤海海峡を挟んで大連・旅順のある遼東半島と向かい合う位置にあり、北京・天津へと向かう海路を睨む位置にある。かつて倭寇に備える狼煙台があった煙台山には、列強諸国が競うように建てた領事館が並んでいた。芝罘神社は煙台山山頂に 1942(昭和 17)年 10 月に創建されている。「芝罘：芝罘尋常小学校創立百周年記念」(芝罘会記念文集作成委員会)に「彼らを讃えた「抗日英雄記念碑」が 1964 年建立されています。説明書に記載ありませんが、神社の台座が記念碑台座として活用されているようでした。」との記載があり、それを頼りに現場を訪れた。抗日英雄記念碑の基壇は五角形になっており、神社基壇を改築して使っているようである。記念碑の後ろにある東屋の基壇は、1940(昭和 15)年頃に日本が建てた戦跡記念碑の基壇がそのまま使われているようである。

煙台山は各国の領事館を保存した異国情趣を楽しむ観光地になっている。各国領事館だった建物の中では様々な展示が行われている。日本領事館と領事館員の寮も残っているが、そこでは展示は行われていなかった。

青島神社 (写真 9、10、11、B/ 見取図 2) 2014 年 5 月 2、3 日

1898(明治 31)年にドイツは膠州湾を租借し、港湾整備や膠済鉄道の敷設を行い、ドイツ東洋艦隊の基地を築いた。その中心都市が青島である。1914(大正 3)年第一次世界大戦に参戦した日本が占領した。日本政府



写真 6 神社に使われた石材と鳥居の柱。写真左端に写る石碑には「長野縣人 山崎武源太 昭和拾七年七月吉日」と刻まれている。奥に見えるのは烈士記念塔

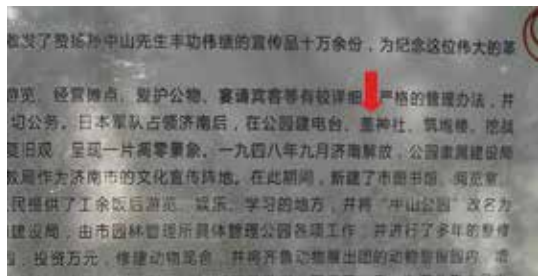


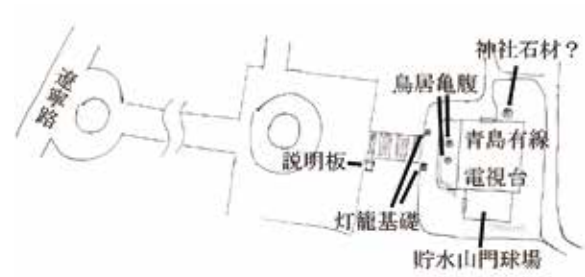
写真 A 済南・中山公園の説明板。「蓋神社」という一文がある



写真 7 芝罘神社跡。抗日英雄記念碑。後ろは観光用灯台



写真 8 記念碑の裏にある東屋。基壇は戦跡記念碑のものか



見取図 2 青島神社跡見取図



写真 9 青島神社跡。階段上り口の右側にはこの場所の由来を書いた碑(写真 B)がある



写真 10 青島神社跡。階段を上った場所にある青島有線電台。本殿・拝殿があった場所



写真 11 青島神社跡。階段と有線電台の敷地の間に残っている鳥居の亀腹

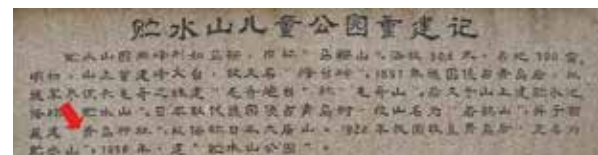


写真 B 貯水山児童公園の説明板。日本時代や青島神社についても書かれている

が翌年出した対華二十一か条要求の中で満蒙權益等と共に山東省ドイツ權益の譲渡も求め、中国は受諾したが、日華関係は決定的に悪化した。1922(大正 11)年ワシントン会議で結ばれた日中山東条約によって中国に返還された。返還後も多くの日本人が紡績や食品加工業を営み、青島は一時、華北最大の軽工業都市となった。日本軍は、1927(昭和 2)年 5 月に北伐に対抗して青島に派兵(第一次山東出兵)したが、内外の批判を受け 9 月には撤兵した。

青島占領と共に軍が神社創建を決め、1916(大正 5)年に「^{注 2}山東省を大陸発展の基地とし、大陸経営の遠大なる理想の下で」官幣大社の規模で作ることを決定し、1919(大正 8)年 11 月 7 日に鎮座した。

境内跡地は貯水山児童公園となり、本殿跡には青島有線電台と貯水山門球場がある。有線電台敷地内の調査は出来なかった。本殿に上る階段は当時のものと思われる。また、階段を上った場所には、灯籠基礎、鳥居亀腹が残されている。また、神社に使用されていたと思われる石材も公園内でちらほらと見受けられた。鳥居亀腹は植え込みに囲まれた場所にあり、私は気付かなかったが、撮影中に集まってきた現地の人達が案内してくれた。

台東鎮神社 (写真 12) 2014 年 5 月 3 日

1915(大正 4)年 3 月に創立され、大国主命を祀った神社。商業地区の台東地区にあった。神社跡地は公園だったが、現在は再開発中でビルを建てている。何も残っていない。

注 1) 「大陸神社大観」(大陸神道連盟 昭和 16 年) P291
注 2) 同上 P284



写真 12 台東鎮神社跡

生活の歴史を読み取る史料としての「家事教科書」

須崎 文代（非文字資料研究センター 客員研究員）

私は2014年度より当センターの共同研究「中国・朝鮮の旧日本人租界」の租界地研究に関わらせていただいております。建築・都市という視点から、特に生活に関わる事物に着目して、研究に取り組んでいきたいと考えております。

2012年秋には若手研究者海外派遣制度で、フランス国立高等研究院 EPHE にて調査研究の機会をいただきました。私の博士論文での研究は日本における台所の近代化がテーマでしたので、日本を含む世界の建築の近代化に大きな影響を与えたル・コルビュジエの住宅作品における台所を中心として、各種博物館、図書館における資料調査を含めて研究を進めました。この時の成果は報告として当センターのニューズレター『非文字資料研究』30号に掲載していただきました。



図1 「家事教科書」の例

昨年度纏めた博士論文では、戦前期に刊行された検定済高等女学校用「家事教科書」を分析対象史料として扱いました。「家事教科書」（図1）には、発行当時の生活に関する様々な事柄が記されています。私の研究が対象とする台所のような生活空間の変化を経年的に解

き明かすための資料にはこれまで限界があったのですが、この教科書という資料は一定の水準で経年的な蓄積がある、非常に貴重なものといえます。

建築学領域は建築物や地域・都市の形態や住生活を扱う学問のため、自ずと建築史研究では旧来から建築図面や写真、スケッチ、地図といった非文字資料をもとにした研究が行われてきました。住宅の変遷を捉えようとする場合、家庭生活の様相の変化にも着目すべきですが、特に中流家庭や庶民の住生活を読み取るた

めの資料は、建築関係資料だけでは十分でない状況がありました。そこで博士論文では、戦前期における台所の変遷を読み取るための資料として、文章、図版ともに豊富な情報の蓄積がある家政学関係書、とりわけ「家事教科書」（現在の家庭科教科書）一に着目し、台所空間や作業形式の変化と、それらに関わった理念に着目して、戦前期における近代化の過程を明らかにしました。

教科書で扱われた内容は、事実の克明な記録というよりは、当時の社会で一般的あるいは理想的と考えられていたものの記述と考えられます。また、教育上使用されたことから、啓蒙的な内容であるという資料の特質は考慮する必要があります。しかしながら、こうした点を踏まえれば、近代における生活の諸要素を読み解くための資料として十分な価値を有し、非常に興味深い資料といえます。

私がこうした「家事教科書」を手に取り、博士論文として纏めるまでに至ったきっかけは、恩師の内田青蔵教授、そしてそのまた先生である平井聖教授がすでにこの資料の可能性に着目されていたことにあります。平井先生は「家事教科書」に関連する論文を発表されていましたし、内田先生のご自宅のアトリエには、既に「家事教科書」を含む家政書が幾つも所蔵されていました。内田先生より「これを使ってもらって構わない」と、本格的な調査研究への着手を促され、今日に至っております。現在では、かなりの数の家政書を収集し、「家事教科書」については私が古書購入によって収集したものをはじめ、国立国会図書館、国立教育政策研究所 教育研究情報センター 教育図書館、国立国語研究所図書館、(財)教科書研究センター附属教科書図書館、東書文庫 東京書籍附設 教科書図書館所蔵の教科書、および国会図書館サーチ、Webcatの検索により情報を得られた全国図書館の所蔵から網羅的

に収集を行い、内田青蔵文庫と合わせると相当程度の所蔵があります。本稿ではこのような「家事教科書」に含まれる非文字資料について、ごく簡単にですがご紹介したいと思います。

まず、取り上げるのは明治26（1893）年、下田歌子により著された『家政学』（博文館発行）です。下田は、明治18（1885）年に創設された華族女学校（のちの学習院女子部）に、皇后の推薦で教授となった人物であり、翌年には学監に就任しています。その後も昭和11（1936）年に逝去するまで、女子教育の振興と近代化を牽引した先覚者です。彼女の著した『家政学』の内容は、女性によって執筆された初めての「家事教科書」でもあります。その後、明治期、大正期、昭和初期まで多数の「家事教科書」が執筆・刊行されましたが、本書がそれらに与えた影響は多大といえましょう。また、それまでの教科書が基本的に文字のみで著されたのに対し、本書は図版を積極的に採録した先進的な教科書でもあります。

本書中の図像からは、当時の生活に纏わる様々な情報を得ることができます。例えば、座る際の手の重ね置き方（図2）から、水の浄化方法（図3）、床飾りと違い棚の設え（図4）のように、説明入りで図示した図版からは、具体的な生活様式や空間・設備の様子が窺い知れます。図4の床飾りからは、かなり高級な住まいであることが窺い知れ、この当時の女学校が想定していた教育対象が上流階級を中心としていたことが推察されます。

その後、大正期や昭和初期に発行された「家事教科書」は、中流階級の子女を対象とした内容へと変化します。そこでは食品化学や建築の環境工学など科学的な教育内容が盛り込まれ、掲載図版も質、量ともに充



図2 手の置き方



図3 「水を良くする法」

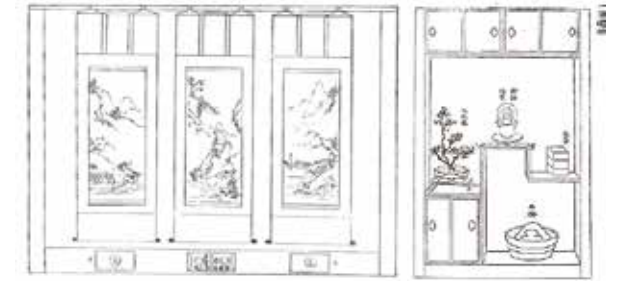


図4 床と床脇（違い棚）の装飾

実していきました。それとともに、図5（出典：西田博太郎、高橋學而ほか『実践 家事新教本 改訂版』帝国書院、昭和10（1935）年）として取り上げた、割烹着を着けて洗濯を行う女性の姿のように、大正期、昭和初期の教科書では家事労働の方法を具体的に説明する図像が見られ、当時の家庭生活に関する詳細な情報が記録されています。



図5 洗濯方法「洗ひ方と搾り方」

このような「家事教科書」が発行された明治・大正・昭和初期、すなわち家政学原論が形成される時期の住居論の展開については未だ殆ど明らかにされておらず、今後取り組みたい大きな課題であります。また、「家事教科書」は日本統治時代の朝鮮や台湾でも同種のものが発行されていました。この資料については、各国でデータベース化が進んでいることが分かっており、今後、国内のものとの比較研究を展開できればと考えております。

連載

戦時下メディア研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

— 「用語編」 その1 —

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

はじめに

非文字資料研究センターが所蔵する戦意高揚紙芝居コレクションについては、先に、本センターの年報『非文字資料研究』第10号「資料紹介 戦意高揚紙芝居コレクション」で、資料の概要・公開上の課題および本センターの研究上の展望を紹介した。その後、本センターの第三期共同研究として、「戦時下日本の大衆メディア研究」班（代表：安田常雄、期間：2014-2016年度）の立ち上げが予定通り行われ、共同研究の主要成果目標の一つとして、本紙芝居コレクション全241点の解題を作成・刊行することが確認されている。これをふまえ2014年度前期中までに、解題作成作業の基礎資料となる紙芝居脚本データの収集、著者履歴情報の調査、復刻雑誌『教育紙芝居・紙芝居』の記事分析などに着手した。



図1 復刻雑誌『教育紙芝居・紙芝居』

本稿は、センターが所蔵する紙芝居コレクション（脚本）から特殊に“戦時下の”と見做される用語および登場人物名を採録・分類した基礎資料にもとづくレポートである。一義的には、紙芝居脚本データを共有することによって、複数の研究者で実施する解題作業におけるコレクション全体への俯瞰性を確保するとともに、個々の作品解題作業の効率化を図ることが目的である。それと同時に、本稿では、紙芝居脚本データにもとづいて、本コレクションの戦時下の特性の解明作業につなげることを目的としている。この点は、上記「資料紹介」（付論）

において、今後の研究課題を、「漫画芸術の系譜にある紙芝居という庶民的媒体が、国威発揚という任務を帯びた時に発する無残さを解明するためには、紙芝居という媒体の『著者性・作品性』という観点から、文芸ものを含む一作品ごと或いは近接主題作品ごとの詳細な分析、困難が予想される脚本家・画家の連携関係や制作環境の調査が求められるであろう」と集約した筆者の問題意識の一端を継ごうとするものである。

この目的に沿い、本『ニューズレター』の場で、「用語編」「人名編」に分けて連載を行うこととしたい。二編に分割するのは、脚本からの採録時に求められる着眼点・集中度がそれぞれで異なるために作業自体を分けて行ったこと、また、時代の空気を一般的に反映し易い「用語」と、個別作品の主題・文脈によって自ずと選択が左右される「登場人物名」とでは、分析内容も、その結果得られる知見も異なるであろうとの予見によるものである。

用語採録の基準および分類

本紙芝居コレクションは、241点中の223点（92.5%）が太平洋戦争下の1941～1944年の4年間に印刷・刊行された作品群を中核としており、1938年の日本教育紙芝居協会の発足に年代的起点を置いた国策紙芝居の全容解明が、本センター共同研究の基本テーマとなっている。太平洋戦争の名称問題と絡めるまでもなく、いわゆる“戦時下”の年代的な上・下限を厳密に定義することは難しいが、一所蔵紙芝居作品の全体を見渡した地点からやや結論を先取りするというならば、近代日本のエリート（政治家、軍人、官僚、知識人、報道従事者等）が創作・流通させ、国民・各階層の生き方に少なからざる影響を及ぼした『軍人勅諭』1882年（明治15年）、『教育勅諭』1890年（明治23年）から『国体の本義』1937年（昭和12年）、『臣民の道』1941年（昭和16年）に至る60年間余り、天皇制軍国主義のもとで我が国の歴史観を復古的に先鋭化させ、戦争観を全体化・高度化させてきた歴史が、曲折しながらも連続しており、それが1940年代前期に極限に達するという文脈のもとで“戦

時下”という歴史像を捉える立場があり得ると考える。採録作業に当たっては、そのような観点に立ち、紙芝居脚本の戦意高揚的文脈に置かれた用語・登場人物名を、歴史的にも地域的にも幅広く（むしろ網羅的に）拾い上げる方針とした。

採録に当たり、一作品中に同一用語・同一人名が複数回出現する場合は、初出のページ箇所を代表的に拾うこととし、作業の比較的初期の段階で分類のイメージを固めたうえで、同一の用語・人名について「作品マスター番号@ページ数」の記録を累積した。その結果、採録総件数は、用語が約770件、登場人物名は約520件を数える。各用語・人名の横欄合計件数は、所蔵241点の各一作品を単位とした出現回数を意味する。以下の文中、作品数は「点」と、採録数は「件」、その出現回数は「回」と表記して区別する（用語等に数字のみを付したものは回数の表示である）。連載第1回目の本稿には、紙幅の関係で、出現回数3回以上の分類用語一覧を巻末に〈別表〉として掲載することとした（「人物編」の掲載基準は別に示す）。

用語の大分類は、[国際関係（01～05）]、[日本軍（06～12）]、[国内社会（13～23）]、[固有名詞（25～26）]、[人物（27）] の5区分とした。[人物（27）] は、登場人物名ではなく、〈父〉〈母〉などの一般名詞である（ただし、チャーチル、ルーズベルト、近衛文麿など、戦時下を象徴する数名の人物名を[国際関係] や[国内社会] の範疇で採録している）。〈別表〉末尾に付した[時代（28）] は、分類5区分とは別に、脚本と刊行年から推定される時代背景を、一作品・一時代として特定したものである。

頻出語から見えること

まず全体像を概観するために、紙芝居脚本データに表れる頻出語（便宜上20回以上とする）を降順に示すと以下のとおりである。いわゆる“戦時下”用語のまったく出てこない作品が約70余点あると見られるので、この頻出語とは、40回で24%、30回で18%、20回で12%と、かなり高い確率で作品に表れる用語であると考えてよい。

手紙、郵便、ハガキ、電報43、銃後36、母33、天皇（陛下）（すめらぎ）31、皇軍28、皇国（或はミクニ）（の御楯）（の興亡）28、日の丸、日章旗、国旗28、御奉公26、アメリカ（人）25、戦死（者）25、イギリス（英吉利）（英国）24、出征（兵士、軍人）、征途24、支那事变（盧溝橋）

23、大東亜戦争 23、大東亜共栄圏（東洋新秩序、東洋平和、アジアの盟主、建設）22、戦地（戦場）22、工場22、貯金（貯蓄、貯蓄報国、共同貯金、通帳、郵便貯金、落葉貯金、国体貯金）21、兄21

この頻出語の組み合わせから、戦時下紙芝居の脚本の底流にある基本的なストーリー性をうかがうことができる。

- ① 〈銃後〉〈母〉（国内社会）と〈戦地〉にある〈出征〉兵士（父・〈兄〉など）とを結ぶほとんど唯一の手段が〈手紙〉であったこと。これが紙芝居のシナリオ（場面）展開の有力な小道具として使用される。
- ② 〈支那事变〉以降、〈大東亜共栄圏〉の理念を掲げ〈皇国の興亡〉を賭けた〈米・英〉との〈大東亜戦争〉において、〈日の丸〉に象徴される天皇の軍隊〈皇軍〉が多く〈戦死者〉を生むことが日常化した社会であったこと。
- ③ その戦争体制を支える〈工場〉での生産強化・勤労員、戦時財政を支える〈貯金報国〉をはじめとした国への〈奉公〉運動が展開されたこと。

このような頻出語が、大衆のメディアとして流通する紙芝居脚本家の創作意識にかなり一般的に反映した時局認識であったであろうことは疑いないが、例えば〈銃後〉と〈戦地〉の対語的・機会主義的な使用などが際立って目につくこともまた否定できない。〈銃後〉なる用語をタイトルに冠する日本近代文学作品としては、日露戦争を背景とした櫻井忠温『銃後』（1913年）あたりが最古かと思われる（国立国会図書館所蔵調査）が、世界史的には第一次大戦の総力戦思想が生み出した〈銃後〉観念は、それから30年の年月を経て、戦時下社会に緊張とともにある種の磨滅を伴いながら浸透していったことをうかがわせる。その他の頻出語についても同様のことがいえるかもしれない。

01/ 国際関係：明治～昭和初期（1930年以前）

用語分類の最初に、我が国が江戸期の鎖国政策を廃し、近代的な国際関係場裏に登場する明治維新以降、第一次大戦後の国際的軍縮会議までの時代認識を表現する用語をまとめた。近代以前は、基本的に我が国の「国史」として、あるいは王政復古理念を用意する江戸期の国学者や勤王の志士物語として扱い得るからであり、また太平洋戦争に接続する日中戦争以降の国際関係は、戦時下紙芝居のボリュームから見て別に扱うことが適切と考えたからである。用語の採録件数は17件である（以下、文

中の用語は出現回数〈3 回以上〉《3 回未満》で区別する。紙芝居脚本からの引用は原則として「イタリック」で現代仮名遣いに改め、用語は太字で示す。

この時代認識区分において、〈**日露戦争**〉が最上位であることは、明治以降の国際関係のもとで戦われた日露戦争が国際場裏における根底的・直接的な変化を助長する契機であったことを物語る。北（ロシア）への備えは太平洋戦争末期に至るまで重要な外交的・軍事的争点となる。関連用語として、《**常陸丸**》《**富国強兵**》《**東郷元帥**》《**賠償金**》《**旅順**》を採録した。続いて〈**日清戦争**〉関係が《**清国**》《**長崎事件**》《**三国干涉**》と合わせて 8 件、〈**第一次（欧州）大戦**〉後の《**ワシントン軍縮会議**》《**ロンドン条約**》といった用語が合計 7 件と、清末中国を巡る帝国主義間の利権闘争、欧米主導の軍縮会議などの国際関係のもとにある日本の姿を描こうとする作品も目立つ。

『進め一億、火の玉父さん』1942.2 では「**日清戦争、日露戦争、満州事変**で一身を御国のために捧げ、**壮烈**、**玉と散った先祖の御霊が大東亜建設は今だ、頼む**」と励ます。第一次大戦は、日本から遠い欧州の戦争であったが、ロシア革命の指導者の著書を連想させる『我は何をなすべきか』1944.10.15 では「**第一次大戦で飛躍的に増加した弾薬の消費量は普仏戦争の 180 倍、マーシャル群島に米軍が打ち込んできた砲弾・爆弾はその 2000 倍**」と兵器の近代化がテーマとなる。「**あの大戦でのドイツの食糧不足**」（『母さん部隊長』1939.4）、「**第一次大戦の戦場で敗北したフランスの戦意の薄弱、軍紀の弛緩**」（『一億楠公』1944.10）と、戦時下の自国に引きつけた話題も登場する。「**ワシントン条約の廃棄、ロンドン条約からの脱退**」（『山本五十六元帥』1943.12）によって国際的孤立（無条約状態）を深め、やがて日中戦争に突入する大正末期・昭和初期から、「**（敗戦の困難を）日清戦争以前の国土と八年に亘る戦争で疲れた力で乗り切らなければならない**」という覚悟を描く『新生』（本コレクションの中では唯一戦後の作品）に至る時期までの原点的用語が、この時代区分の中に登場しているということができよう。その一方で、単独の戦争では、日清戦争 13,309 人（うち病死 11,894 人）、日露戦争約 84,000 人（『國史大辭典 11』吉川弘文館、1990）に次ぐ約 8,000 人余の戦死者を生んだソ連赤軍・モンゴル軍との局地的戦闘「ノモンハン事件（1939 年 5 月～9 月）」は、この時代区分より後の紙芝居作品にも何故か一度も登場してこないことを付記しておきたい。

02/ 国際関係：亜細亜

この括りは、日中戦争以降、太平洋戦争に接続する時期のアジアを中心とした国際関係・時代認識を示す用語が頻出する国策紙芝居の主要なフィールドである。そのために採録用語数も全 85 件と多いが、①支那事変・満州事変を背景とした中国（支那・満州・中華民国）関係、②大東亜共栄圏関係、③これと密接に関係する南進論の系譜を汲む用語の三つの系統に大別することができる（以下、脚本から「支那」など当時の用語を部分的に使用する）。

共通して指摘できることは、「地名」の多さであり（③南進論関係では大半を占める）、しかも、現下の「戦闘地としての地名」ではなく、歴史的な文脈や回想シーンの中に埋め込まれることによって、単にエキゾチズムを喚起する以上に、日本（人）にとってもともと馴染み深い地域として想起させる効果をもたらしていることである。この点は脚本を示さないと説得力に欠けるが、紙面の関係で以下に「地名」のみを掲げる。

① 中国（支那・満州・中華民国）関係
南支 4、上海 4、北支 3、北京 3、朝鮮 3、海南島 2、揚子江 1、シナ海 1、天津 1、中支 1、大連 1、関東州 1
③ 南進論関係
ビルマ 8、インド（印度）6、蘭印 4、仏印 4、タイ（泰国）4、安南 3、ポルトガル 3、スペイン 2、南極 1、千島、樺太 1、印度洋 1、印度支那 1、メキシコ 1、バリ 1、ハノイ 1、シャムロ国 1、ジャカルタ 1、シベリア 1、カルカッタ 1、カラチ 1、アウチャ（アユタヤ）1

〈ポルトガル〉《スペイン》といった西欧の国名が③南進論関係に入っているのは、植民地宗主国・米西戦争の関係があるからであり、また海洋国家としての広がり誇る文脈において、《南極》《メキシコ》《シベリア》といった地域名までもが含まれているのも特徴といえよう。

続いて [02/ 国際関係：亜細亜] に分類した「地名」を除く用語使用を概略的に紹介する。

① 中国（支那・満州・中華民国）関係

〈蒋介石〉《汪主席、汪精衛》という象徴的人名、蒋介石と一体の〈重慶〉、〈満州国〉〈支那（大陸）〉〈中華民国〉《青天白日旗》《中国》《国民政府》という清国滅亡後の入り組んだ国名で主要なシナリオを構築する中に、〈支那〉を冠した〈子供・人〉・《服・語・商人》などの聞き馴れた熟語が、紙芝居の風景的点描として配置される。〈抗日支那（暴戾）〉《排日》《共產軍》《便衣隊》（私服・民族服などを着用し民間人に偽装した兵士）などの敵対

勢力を示す用語で日中戦争の泥沼化（作品中では奮戦する日本兵士の姿）が印象付けられる一方で、〈満州〉に係る《建国記念日》《開拓団》《鉄道》《日満一体》《**楽土建設**》、さらに《**新中国建設**》《**和平防共**》といった日満支三国の〈**大東亜新秩序**〉の建設が謳われる。代表的作品として『光の歌』1942.7 を挙げることができる。

作品に〈**蒋介石**〉が現れるのは、『貯金爺さん』1939.12 が最初であるが、その後も『チョコレートと兵隊』1941.7、『進め一億、火の玉父さん』1942.2、『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12、『撃ちてし止まむ』1943.3、『閻魔の廳』1944.12 などの代表的な国策紙芝居に、日本に抗する中国の象徴としてコンスタントに登場する。その一方、山室信一『キメラの帝国』（中公新書、1993.7.25）によれば、1931 年 9 月満州事変勃発当時の 23 万人に対し 1945 年 8 月には 155 万人に達していたといわれる在満日本人の物語は、《**開拓女塾**》（「大陸の花嫁」を養成するために 1940 年に創設された女子義勇隊訓練所）を背景とした『母は泣かず』1944.12 一作のみである。

② 大東亜共栄圏関係

第二次近衛内閣（1940 年 7 月 22 日～1941 年 7 月 18 日）は、「基本国策要綱」（1940 年 7 月 26 日）において、従来の日満支三国による東亜新秩序を発展させた〈**大東亜**〉の新秩序建設を打ち出し、国内の新体制確立とならぶ国策の基本方針とする。〈**大東亜共栄圏**〉は同年 8 月 1 日松岡洋右外務大臣の記者会見の声明が定着したものとされる（大杉一雄『日米開戦への道（上）』講談社学術文庫、2008.11.10、p 274）。またその地理的範囲は、1940 年 9 月 16 日大本営政府連絡会議決定『皇国ノ大東亜新秩序建設ノ為ノ生存権』により、「日満支を根幹とし、旧独領委任統治諸島、仏領インドおよび同太平洋島しょ、泰〔タイ〕国、英領馬來〔マレー〕、英

領ボルネオ、蘭領東インド、ビルマ、濠州〔オーストラリア〕、新西蘭〔ニュージーランド〕ならびにインド等」とされた。開戦後これは、〈**アジアの盟主**〉として西洋列強による〈**東洋侵略**〉《**植民地**》化から〈**東洋平和**〉を守り、《**共存共栄**》の〈**東洋新秩序**〉を建設することを目的とした《**自存自衛（栄）**》の戦いであるという聖戦理念（イデオロギー）となり、名称も「支那事変をも含めて大東亜戦争」と称することになる。戦時下の一連の作品群が、これらの〈**大東亜共栄圏**〉理念や戦争目的をほぼ無条件に（流行語的にというべきか）転用して成立していることは指摘するまでもない。戦争目的に関連しては、松本健一『日本の失敗』（岩波現代文庫、2006.6.16）が、「（後の東条内閣外務大臣）重光葵がこの戦争には動機はあっても目的がない」「自存自衛は戦う気分の問題で主張の問題ではない。東亜の解放、アジアの復興が即ち日本の主張であり戦争目的である」との戦略をもって、「1941 年 8 月 4 日にルーズベルトとチャーチルが発表した大西洋憲章に対抗して東亜新秩序を位置づけ、その戦争目的が達成されれば終結を宣言できると考えていたと思われる」（p 311～313）と述べていることを紹介しておきたい。東亜民族の解放を謳うことによって、植民地主義が否定された第一次大戦後の国際関係のもとで日本のアジア進出の対等な理義を追及するとともに外交主導で対中国の局面転換を図ろうとする動きがまだ存在したのである。

③ 南進論関係

1941 年 12 月 8 日未明、真珠湾攻撃の約 2 時間前、日本陸軍はイギリス領マレー半島に上陸、イギリス政府に対する宣戦布告前の奇襲によって太平洋戦争の戦端が開かれ、戦線は、中国大陸とともに、東南アジア諸国、太平洋の島々に飛び石的に拡大する。紙芝居作品では、東南アジア・南洋の諸地名を織り交ぜながら、〈**南進（方、海、**



図2 建設漫画会編『勝利への道』1942.9.15 より

国、洋)》とともに、《海洋(発展、国家、民族)》《海防》《海運国》といった南の海に誘う用語が多く使用される。この分類用語括りはあくまで「戦闘地以外」と定義し(上述)、『南海の侠児』1941.12、『海國の民』1942.7、『八幡船』1944.12、『南海の防人』1944.7、『子どもの海』1944.11、『海の男』1944.9といった歴史ものや漁民を描いた作品からの採録が主であるにもかかわらず、そうした傾向が見られる。研究者によっては実在を疑問視する『山田長政』1943.6は《閩南》の先覚者(1915年贈従四位)として描かれる。このような一連の作品群の存在は、自国を歴史的な海洋国家として位置付けることで、南方の諸「地名」が日本(人)に馴染み深い地域を想起させることと相乗しながら、軍事的進出〈南進〉をある種の歴史的必然として描く効果をもたらしている。

03/ 国際関係：非枢軸国(欧米)

開戦に伴い、諸メディア(紙芝居も例外ではない)をとおして国民の耳目に浸透していく「敵の顔」を表す用語を、[03/ 国際関係：非枢軸国(欧米)]として47件採録した。

天皇大権による開戦の詔勅が〈**米英**〉両国に対して発されたものであることを顧みるまでもなく、日本にとって「敵」とは先ずは〈**アメリカ**〉〈**イギリス**〉であり、続いて日本に宣戦布告した重慶の蒋介石政権(大日本帝国の政権未承認国、12月9日)と、《**オランダ**》(ナチスドイツに降伏したロンドン亡命政府指揮下の蘭印総督府、12月10日。日本の対蘭宣戦布告は1942年1月12日)からなる連合国(非枢軸国)であった。この四カ国を指して〈**ABCD包囲網**〉と名付けたのは日本側である。これは、日中戦争の長期化の原因である援蒋ルート
の遮断とともに、南方の戦略的資源(特に石油)の独占的な確保を目指した南進政策に対する連合国側の軍事的・経済的包囲網の別名であり、これら四カ国への敵愾心を煽るうえで大いなる効果があったといわれる。戦時下国策紙芝居の代表作ともいえる『大建設』1942.3、『敵だ!倒すぞ米英を』1942.12、『撃ちてし止まむ』1943.3の三作品に〈**ABCD包囲網**〉の用語が登場する。

第二次大戦が「ファシズム対デモクラシー」のイデオロギー戦争であるとともに、「人種戦争」の側面があることを指摘し詳細に分析したのはジョン・ダワー『容赦なき戦争』(平凡社ライブラリー、2001.12.1)である。「人種の憎悪が残忍性を煽り、その残忍性が今度は人種的憎悪の火に油を注いだ。他者を非人間化することによって、

相手との間に心理的距離が生まれ、それが戦場ばかりか遠く離れたところにいる戦略家たちによって決定される作戦での殺戮を、しごく容易にした」(p.46)と述べ、プロパガンダに使用された漫画等をとおして欧米人・日本人の双方から見た人種戦争の実態を分析した本書は、国策紙芝居の解釈にも多くの貴重な視点を提供している。

ダワーはこの中で、「真珠湾攻撃の二ヵ月後、(中略)最も精力的なナショナリストの漫画家の一人だった近藤日出造は(中略)、小型の日本機によって法衣をまくり上げられた神父として」(p.410)敵国〈**米英**〉の二人の指導者の顔を描き、また「日本はABCD勢力を駆逐する灼熱の太陽として」(p.405)表現されたことを紹介している。戦時下を象徴する人物として例外的に用語編にも採録した〈**ルーズベルト**〉《**チャーチル**》は、紙芝居の中にほぼペアで、脚本・絵画の双方、絵画のみ、脚本のみと3つのパターンで登場する。絵画としては、リンゴを齧る黄色(チャーチル)と緑色(ルーズベルト)の芋虫(『敵だ!倒すぞ米英を』近藤日出造画、1942.12)、プリンス・オブ・ウェールズ号で大西洋憲章締結の洋上会談に臨む軍服着衣のチャーチル、スーツ姿のルーズベルト(『英東洋艦隊全滅す』1942.11)、アジア人が引く米英乗合馬車の二人の馭者(『大建設』1942.3)、地獄の鬼に捉えられたルウ介、チャア六、セウ吉という名の亡者(『閻魔の廳』1944.12)など多様であり、『一億楠公』1944.10のように、NBC、CBSのマイクの前で絶叫的演説をするルーズベルトのみを描いたものもある。脚本の言葉上の過激さに比べて、どこか愛嬌を残した(或いは窮地に追いこまれて困惑・混乱したというべきか)紙芝居絵画の人物像は、ダワーが指摘する「英米の報道機関で氾濫した徹底的に非個人化、非人間化した日本人の絵画イメージ」と対照的な「擬人化されることが多かった」動物イメージ、「獣性、鬼、鬼畜、発狂したか墮落した人間」によって形象化された日本漫画の特徴(同p.405)と重なるところかもしれない。



図3 紙芝居「大建設」より

脚本用語に戻ると、米英の〈**暴戾・暴虐**〉《**暴慢無礼**》《**搾取**》に対して《**正義・人道**》《**破邪顕正**》の戦いを挑む日本の軍隊が、『軍神の母』1942.6、『光の歌』1942.7、『中澤挺身隊』1943.10などの皇軍ものの紙芝居で描かれる。また『スパイ御用心』1941.12、『防諜戦士』1942.6などの防諜ものの紙芝居では、《**持てる国(者)**》に対する《**欧米賛美主義**》《**外国崇拜**》を戒め、《**米英恐怖症**》に陥らない〈**外国人**〉への備えが銃後の国民に対して説かれる。

太平洋戦争初期の戦果で「勝利病」に酔っていた日本軍は、しかしその後、1942年6月ミッドウエー海戦の敗北を転機として、1942年8月ガダルカナル島の戦い、ソロモン海戦からの転進、1943年4月18日司令長官山本五十六の撃墜死、1943年5月アリューシャン列島アッツ島の玉砕、1944年3月インパール作戦の歴史的失敗、1944年7月サイパン島日本軍守備隊3万の玉砕と敗北を重ねていく。〈**米英撃滅**〉の用語が現れるのは、この時期の紙芝居作品においてである(『光りの歌』1942.7、『踏切番と子供達』1942.10、『風呂屋の大ちゃん』1943.1、『撃ちてし止まむ』1943.3、『妻』1943.7、『銅像物語』1943.8、『空の軍神加藤少将』1943.11、『山本五十六元帥』1943.12、『初陣』1944.4など)。『踏切番』『風呂屋』『妻』『銅像』といった子供向け・婦人向け作品にも、このような用語が躍り始めることを特記しておくべきであろう。

こうした外部の「敵」(ヨソ者)のイメージ化に関して、ジョン・ダワーは、「神秘的で超自然的な能力」をもつ「動物の霊または悪鬼」として表現する日本の民俗宗教的伝統を指摘し、「古代初期の支配者による遠隔地の平定の敵」(夷)から、「16世紀なかばのポルトガルとスペインの船乗りや聖職者」(南蛮人)、「鎖国期のヨーロッパ人」(毛唐、紅毛人)、「19世紀に開国を迫った西洋人」(攘夷)に至る例を挙げながら(p.395～400)、「戦時中の敵に対する日本のプロパガンダの支配的な隠喩」は「半宗教的な鬼または鬼畜へ移行」するという(p.409)。紙芝居作品の中に最初に登場する「敵=鬼」の表象は、『**赤鬼**》(『進め一億、火の玉父さん』1942.2)であり、『**鬼畜米英**》(『空飛ぶ御盾』1943.8、『神兵と母』1944.9)、さらに〈**米鬼**》(『忠霊陣地』1944.6、『日本工員』1944.10、『我は海の子』1945.1)と、太平洋戦争の後半になるにしたがって増加することが見て取れる。日本本土への初空襲は1942年4月18日のドーリットル空襲であるが一このとき朝日新聞は「鬼畜の敵、校庭を掃射」と報じる(櫻

本富雄『空席通信』第12回「少国民の殉職をめぐって」)一ダワーは、「短波のプロパガンダ放送、日本の諸都市に対する焼夷弾爆撃の開始と、本土侵攻のための具体的な計画作り」を可能にした1944年のなかばのサイパン占領(日本軍における絶対国防圏の崩壊)が、米英鬼畜視の転換点となったと指摘している(p.412)。「婚約者から頭蓋骨を贈られた若い女性の写真」(p.417)を載せたアメリカの写真誌『LIFE』(1944年5月22日号)が、米兵の残虐な印象を日本国民に植え付けたことも良く知られているところである。



図4 『写真週報』第267号p.5
「ばくらの友達を射殺した米機の仇はきつと討つぞ」

戦時下紙芝居における「敵の顔」の形象化に関連してもうひとつ指摘しなければならないことは、先に述べた「脚本の言葉上の過激さ」、言い換えれば肩肘張った強がりの裏側に貼りつくように、近代日本国家の遅れと弱みを示す表現が少なくないことである。例えば、『持てる者の無礼と傲慢』(『宣戦』1942.12)、「米英共はどんなに背が高かろうが鼻が高かろうが虫ケラも同然」(『敵だ!倒すぞ米英を』1942.12)、「世界の誇る二大強国米と英
相手にとって不足はない」(『大建設』1942.3)、『世界の横綱であった米英を向うにまわし」(『小楠公の母』1943.03)などの脚本である。自国の後進性と戦力的弱小性の自覚とのギャップが、このような表出を実現してしまうことについて、ダワーの原著よりほぼ10年早く、橋川文三が『黄禍論』(筑摩書房、1976.8、以下引用は岩波現代文庫、2000.8.17)において、「(近代日本の人種論的軋轢は)むしろ白色人種の事実上の優越によって刺激され、絶望的にまで高められた抑圧感から生まれた倒錯的信念に近いものであった」(p.202)と書いていることを想起したい。ダワーがいう「英米の報道機関で氾濫した徹底的に非個人化、非人間化した日本人の絵画

イメージ」との対比についても、橋川に「白人たちが日本人に対して集中した人種差別に比べるならば依然としてやはりふっきれないコンプレックスの影をとどめている。黄色い野獣として日本を見る彼らの姿勢の方がより明瞭であった」(p 232) と同旨の指摘がある。戦時下の日本において、この抑圧的心情・劣等性の倒錯は、対外的には「大東亜共栄圏によるアジア解放の聖戦理念」(既述) へ転化したであろうし、国内的には「人種哲学に代位するものとしての民族の政治的優越性(万世一系・皇統連綿・天壤無窮等)」(p 208) を宣揚した『国体の本義』1942 年に象徴的に顕現化するだろう。

04/ 国際関係：枢軸国

この[国際関係：枢軸国] に採録された用語は、上記に紹介した [02/ 国際関係：アジア]、[03 / 国際関係：非枢軸国(欧米)] に現れる用語に比べて、登場回数5 回の〈ドイツ(人)〉のほか、『日独伊同盟(三国条約)』2 回、『イタリア』《枢軸(諸国)》各1 回の合計4 件と極端に少ない。敵愾心を煽り戦争体制への精神動員を図ることを基本的性格とするプロパガンダ作品群において、同一陣営の姿を描く必然性も創作動機も低いのは、ある意味で納得されるところではある。

ともあれ関連用語の登場場面を挙げると、〈ドイツ(人)〉は、友国ドイツ軍・艦隊の侵攻(『草鞋長者』1941.7、『英東洋艦隊全滅す』1942.1.21)、贅沢を諷める謹厳質素な在日ドイツ婦人(『母さん部隊長』1939.4)であり、また、〈ドイツ(人)〉〈イタリア〉として採録した独伊八カ国の国民政府承認(一蒋介石に代わる新たな交渉相手として日本が擁立した南京汪兆銘政権で枢軸側八カ国が承認。『光りの歌』1942.7)である。《枢軸(諸国)》は、大陸横断試験飛行によって大東亜・枢軸諸国を結ぶ南方航路を開拓した『「神風」の飯沼正明』1943.9 に登場する。

さらに、当時の[国際関係・枢軸国] のもっともリアルな表象として、『日独伊同盟(三国条約)』の用語が、これまでも紹介してきた『大建設』1942.3、『敵だ! 倒すぞ米英を』1942.10 の二作品に現れる。これは、1941 年4 月から野村吉三郎駐アメリカ大使とコーデル・ハル國務長官との間で行われていた国交調整交渉におけるアメリカ側の提案(1941 年11 月26 日「ハル・ノート」) 中の「他ノ諸国ノ国内問題ニ対スル不関与ノ原則」の主項目「①中国・仏印からの全面的無条件撤退、②満州国・汪兆銘政権の否認、③日独伊三国同盟の実質的廃棄」を、

日本側が事実上の最後通牒と受け止め、米英への宣戦布告に至ったという文脈の中で登場する。『大建設』では「無法な注文」「他国の主権を無視した暴慢無礼な提案」、『敵だ! 倒すぞ米英を』ではまさに「最後通牒をつきつけた」、「まるで喧嘩の果し状ではないか」と最大級の悪罵が投げつけられる場面である。



図5 紙芝居『大建設』より

05/ 国際関係：戦闘地(交戦、作戦、戦争)、戦局

国策紙芝居の時局認識の5 番目の括りとして、日中戦争から太平洋戦争に至る時期の[国際関係: 戦闘地(交戦、作戦、戦争)、戦局] をまとめた。採録用語数は、「戦闘地としての地名」を中心に43 件を数える(その中には歴史ものの作品の地名と偶然同一のものもあるが、極く少数のため誤差の範囲として扱うこととした)。

総称としての〈大東亜戦争〉—最多23 回以外の用語と出現回数を、地域別に示すと以下の通りであり、東南アジア、太平洋の比重が中国大陆よりも2 倍以上高くなっている。

中国大陸関係：13 件、47 回
支那事变(盧溝橋) 23、南京(攻撃(略)) 5、満州事变 5、香港4、漢口2、山東省第四区軍(抗日戦争戦区) 1、錦州占領1、広東1、山西1、支那事变記念日1、支那派遣軍1、徐州1、武漢1
東南アジア、太平洋関係：29 件、109 回
太平洋17、ハワイ(真珠湾、海戦) 15、シンガポール8、フィリピン8、マレー(半島)8、ジャワ(沖海戦)6、台湾(海峡) 6、スマトラ4、ソロモン(諸島、海戦) 4、マレー沖海戦4、ボルネオ3、アッツ島2、ガダルカナル2、グアム2、ダバオ2、ニューギニア2、マーシャル諸島2、マニラ2、マラッカ2、ウエーキ1、クエゼリン島1、サイパン1、サンゴ海海戦1、テニヤン1、

バタアン半島1、バレンバン1、ブーゲンビル島1、ルソン(呂宋) 1、西太平洋1

また、本分類の用語を一つでも脚本中に含む作品は、71 点(本センター所蔵数の約29%) にのぼることを確認しており(筆者手元資料による別途カウント)、作品数としては別表「中分類」の中で上位に属するのではないかと考えられる。同じく一作品中に「戦闘地としての地名」を多く含むものとしては、11 件『光りの歌』1942.7、8 件『進め一億、火の玉父さん』1942.2、同『敵だ! 倒すぞ米英を』1942.12、7 件『空の軍神加藤少将』1943.11、6 件『大建設』1942.3、同『山本五十六元帥』1943.12 などの既出の作品タイトルを、ここでも挙げる事ができる。今戦っている戦争の世界性を訴求する効果が、脚本中に多くの戦闘地名を配することによって生み出されている。

出版年と用語の相関で見ると、所蔵作品241 点の出版年は、1941・1942 年が山を成して以降漸減する(年報10 号 P368) のに対して、「戦闘地としての地名」を含む作品71 点は、1940 年以前2 点(2.8%)、1941 年13 点(18.3%)、1942 年17 点(24%)、1943 年19 点(27%)、1944 年18 点(26%)、不明1 点(1.8%) と、1942 年から1943 年にかけて一年遅れで増加している。東南アジア・太平洋で激化した戦闘が、紙芝居作品(それはとりも直さず国内生活を意味する) に身近なものとして侵入してきていることがうかがわれる。

その一方で、個別の用語—例えば《ハワイ(真珠湾、海戦)》の例を見ると、1942 年刊行作品を中心に、「対日米開の戦臨時ニュース」、「初期の打ち続く戦果」の場面や、「1942 年4 月30 日東条内閣によって 実施された『翼賛選挙』」の枕詞として使用されているのに対して、1943 年後半以降の作品では、そのような使用例がほぼ姿を消し、『山本五十六元帥』1943.12 では「大正10 年アメリカ・アナポリス海軍兵学校」での回想シーン、『發明への道』1944.4 では「真珠湾攻撃にも使用された潜水艦を動かす蓄電池」の発明となり、さらに『神機いたる』1944.11 に至っては「初期の大戦果への気のゆるみ」を観客に訴える文脈に登場するというように、興味深いストレートな変化も見られる。

以上、本来ならば作品に沿った戦闘地の分析をさらに行う必要があるところだが、複雑な戦史に関する筆者の知識不足とともに紙幅の制約もあるため、今後行うことになる個々の作品解題での言及・分析を期し、ここでは専ら用語の定量的な傾向性を指摘することとした。

戦時下紙芝居の(背景ではなく)「主題としての国際関係」を対象とした本稿(連載第1 回)は、脚本そのものに分け入った解明よりも、むしろ作品群の時代認識に対する包括的なアプローチに自ずと比重を置くことになったが、次回以降で対象とする分類項目においては、採録用語の使用例を含めた紹介にも重点を置くことしたい。(続)

<付：参考資料>

戦時下に数多く出された出版統制資料の中から、本文 [03/ 国際関係：非枢軸国(欧米)] で言及した「敵の顔」の形象化に密接に関連する文書として、『資料日本現代史 13 太平洋戦争下の国民生活』(大月書店、1985.7.22) 所収「資料26 雑誌指導方針実現方策(案)」を参考資料として掲載する。資料解題によると「国立公文書館所蔵・米国返還文書『雑誌指導資料』と題された情報局第二部出版課関係資料の綴に収録され」、「作成年代を断定する根拠を欠くがほぼ同時期(1944 年 引用者注)のものともてさしつかえない」とされているものである。(読み易くするために現代仮名遣いに改め、本稿に関連する箇所のみを抜粋・掲載する。)雑誌指導方針実現方策(案)

- 趣旨(略)
- 実現方策
 - 敵愾心の徹底的昂揚
 - 参謀本部並に軍令部(ママ)に保存、未公開の戦闘詳報の国民への発表(但作戦の経緯を除く)／(注)陸軍に於ては国民戦史奉公会に於て企画中
 - 曩次対日放送に於て米英首脳は何を高言せるや、内地新聞、ラジオ、雑誌等の之が取扱方を見るに概ね「笑殺」或は秘匿するに一致せる如きも、其の如きは敵愾心結集に些かも資することなし。好材料を宜しく流したるものなるべし。余りに曲なき扱方なり。
 - 具さに欧州に於ける戦場報告を語らしむるも一方法なり。
 - 空襲被害、人馬殺傷の表現も写真等を謀略的に大いに活用すべし。
 - 米英の所謂「私刑」政策、「分割統治」の原則による西南太平洋、フィリピン、ビルマ、マライ、ジャワ等の攻略、虐殺政策の事実を知らしめよ。／彼等は敵なり、不倶戴天の敵は一兵、一人と雖も之を生かすべからず。／日本の漫画を見るに、ルーズベルト、チャーチルを描きて、ユーモラスなり。文章亦単純拙劣なり。／到底独ソ欧州の政治漫画に比すべくもあらず。／ソ連紙に掲載せられたる盟邦元首の漫画の、日本人にすら嫌悪感を催さしむるに比すれば、日本人作家、画家等の敵愾心は余りに浅薄なり。
 - 米英人の感覚的にして、動物的支配欲のみなる下等動物感未だ国民に徹底せず。宜しく斯る意味に於て米英抹殺論を喚起すべし。
 - アメリカの文明何ぞ。英国何ぞ。その根底たるジンゴイズムを徹底的に剔抉すべし。
- 生産の飛躍的增加(略)
- 国民生活の明朗闊達化(略)
- 三原則の調和(略)



別表 分類用語一覧

NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数	NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数	NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数
01	国際関係 ：明治～昭和初期（1930年以前）	日露戦争	14	07	日本軍 ：軍隊・軍務	戦地（戦場）	22	14	国内社会 ：国史	神風（飛行機も）	5
		ロシア（露国）	7			戦友	16			西郷隆盛	4
		フランス	7			敵機（襲来）	12			敵国降伏	4
		第一次（欧州）大戦	4			輸送船（団）	11			南朝	3
02	国際関係 ：亜細亜	日清戦争	4			天皇（陛下）（すめらぎ）	31				
		大東亜共栄圏（東洋新秩序、東洋平和、アジアの盟主、建設）	22			皇国（或いはミクニ）（の御極）（の興亡）	28				
		南進（方、海、国、洋）	18			日の丸、日章旗、国旗	28				
		蒋介石	13			神国日本、神州	12				
		満州（国）	10			大神、大君	12				
		ビルマ	8			天子様	12				
		支那（大陸）	7			大和魂（心）（敷島の〜）	11				
		インド（印度）	6			大御様威（おほみいつ）	10				
		アジア（亜細亜）	5			臣民（の道）	8				
		重慶	5			勤王	7				
		仏印	5			愛国	6				
		タイ（泰国）	4			天祐（神助）	6				
		上海	4			明治天皇	6				
		南支	4			紀元2600年（皇紀2600年）	5				
		蘭印	4			宮城（皇居）	5				
		ポルトガル	3			尽忠（報国）	5				
		安南	3			聖恩、聖慮、朝恩、皇恩	5				
		抗日支那（暴戾）	3	大御心（を奉戴、を安じる）	5						
		支那（子供、人）	3	朝廷	5						
		中華民国	3	天照大神	5						
		朝鮮	3	国運（隆盛）	4						
		東洋（侵略）（東亜侵略）	3	国体（或いはくにがら）	4						
		03	国際関係 ：非枢軸国（欧米）	アメリカ（人）	25	尊王（攘夷、愛国）	4				
				イギリス（英吉利）（英国）	24	朝敵	4				
米英	16			日本精神（魂）	4						
ルーズベルト	12			日本男子	4						
米英撃滅	9			悠久の大義（光栄）	4						
チャーチル	8			大和民族	3						
欧米（ヨーロッパ）、英米仏蘭	7			七生報国	3						
外国	4			臣道実践	3						
豪州	4			赤子（天皇の）	3						
東洋艦隊	4			大日本帝国	3						
A B C D包囲網	3			万世一系	3						
外国人	3			明治維新	3						
米鬼	3			暹羅	3						
暴戾、暴虐	3			16	国内社会 ：政治外交	国難、国家非常、国の危急、国の一大事	12				
04	国際関係 ：枢軸国	ドイツ（人）	5			新体制（秩序、時代）	5				
		支那事変（盧溝橋）	23			総力戦	4				
		大東亜戦争	23			高度国防国家	3				
		太平洋	17			戦時体制（戦時下）	3				
		ハワイ（真珠湾、海戦）	15			総選挙	3				
05	国際関係 ：戦闘地（交戦、作戦、戦争）、戦局	シンガポール	8			総動員	3				
		フィリピン	8			大政翼賛	3				
		マレー（半島）	8			東条英機	3				
		ジャワ（沖海戦）	6			工場	22				
		台湾（海峡）	6			水田、米	16				
		南京（攻撃（略））	5			食糧増産	10				
		満州事変	5			科学（する）、科学知識、科学日本、科学戦、技術	8				
		スマトラ	4	金（金属）売買、収集、金属回収令、銅鉄回収、ボーキサイト、錫、ニッケル、補助貨回収	8						
		ソロモン（諸島、海戦）	4	職域奉公、職分奉公、戦場は戦場	8						
		マレー沖海戦	4	電気（発電、電池、蓄電池）	4						
06	日本軍：皇軍物語一般	香港	4	ゴム	3						
		ボルネオ	3	工員	3						
		皇軍	28	少年工	3						
		宣戦（布告）（詔勅）（大詔）	12	石油、石炭	3						
		武運長久	9	17	国内社会 ：生産、食料、資源	手紙、郵便、ハガキ、電報	43				
		聖戦（貫徹、完遂、の本義）	8			汽車	15				
		大本営（発表、報道部）	7			自動車	8				
		軍神	6			ラジオ	7				
		決死隊	6			国民学校	12				
		志願（兵）	6			銃後	36				
		帝国軍人	6			隣組（隣保班、町内会）	17				
		肉弾（突撃）	6			常会（婦人常会）	15				
		長期戦	4			提灯（赤〜、行列）	6				
		山本五十六	3			回覧板	5				
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		18	国内社会 ：交通、通信、メディア	国民学校	12						
				銃後	36						
				隣組（隣保班、町内会）	17						
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				19	国内社会：教育	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		20	国内社会 ：銃後生活、銃後団体			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				21	国内社会 ：動員・奉仕・生活改善	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		22	国内社会 ：標語			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				23	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		24	国内社会 ：地名（日本）			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				25	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		26	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				27	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		28	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				29	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		30	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				31	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		32	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				33	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		34	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				35	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		36	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				37	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		38	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				39	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		40	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				41	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		42	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				43	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		44	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				45	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		46	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				47	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		48	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				49	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		50	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				51	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
		常会（婦人常会）	15								
		提灯（赤〜、行列）	6								
		回覧板	5								
		少年団（少年戦士）	3								
		大日本国防婦人会	3								
		52	国内社会 ：防諜、防空			国民学校	12				
						銃後	36				
						隣組（隣保班、町内会）	17				
				常会（婦人常会）	15						
				提灯（赤〜、行列）	6						
				回覧板	5						
				少年団（少年戦士）	3						
				大日本国防婦人会	3						
				53	国内社会 ：防諜、防空	国民学校	12				

主な研究活動

運営委員会

2014年度		
第3回	6月26日	2014年度海外提携機関からの招聘研究員について、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、奄美・沖縄班による公開研究会（10/26）の開催について、『「年報 非文字資料研究」査読規程」の名称変更について
第4回	7月30日	2014年度研究担当者人事について、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、2013年度奨励研究者の成果論文の査読分担について
第5回	9月24日	2013年度奨励研究者の成果論文の査読結果について、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、2014年度海外提携機関からの招聘研究員について、2014年度予算「研究班共通経費」の使用計画について、Windows Server 2003サポート終了に伴う「21世紀COEプログラム」各種データベースの扱いについて、『ニューズレター』No.33編集計画について、第46回租界班研究会企画について
第6回	10月29日	2015年度予算の編成方針について、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、2015年度奨励研究募集要項の条件改訂について（応募資格の拡大/募集期間の延長）
第7回	12月3日	2015年度予算（案）について、2014年度予算残額の扱いについて、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、2014年度海外提携機関からの訪問研究員について、2015年度奨励研究募集要項の条件改訂について（応募資格拡大に向けた、研究科委員長宛て文章について）

研究員会議

2014年度		
第2回	7月30日	2014年度研究担当者人事について、海外神社班の公開研究会（11/22）について
第3回	10月29日	2015年度予算の編成方針について、2014年度研究協力者人事について、2014年度予算「研究班共通経費」の追加申請について
第4回	12月3日	2015年度予算（案）について、2014年度予算残額の扱いについて、2015年度奨励研究募集要項の条件改訂について（応募資格拡大に向けた、研究科委員長宛て文章について）

研究会

研究班

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究・研究会	10月22日、11月5日
19世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究・研究会	7月29日
中国・朝鮮の旧日本租界・研究会	7月18日
戦時下日本の大衆メディア研究・研究会	8月27日
海外神社跡地のその後・研究会	6月4日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
海外神社跡地のその後	9月8日～9月16日	北朝鮮	中島三千男・津田良樹・前田孝和・稲宮康人・菅浩二・坂井久能
汽水の生活環境史	12月12日	横須賀	安室知・川島秀一・常光徹・松田陸彦・山本志乃
戦時下日本の大衆メディア研究	12月13日	東京	安田常雄・富澤達三・新垣夢乃・原田広・松本和樹

表紙紹介

非文字資料研究センター研究成果報告書『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編（2014年3月刊）にちなんで、その内容に関連する写真を取り上げた。上から首里城漏刻門（絵引P.34、ただし復元されたもの）、八重山のクバ笠（絵引P.62ほか、写真は石垣市内の土産物屋で撮影）、奄美の群倉（絵引P.126、写真は大和村で撮影）である。絵図そのものから考察するという目的上、絵引に写真は載せなかったが、完成した絵引とともに、こうした参考写真を眺めてみることで、また絵引の味わいが深まるのではないだろうか。（写真撮影 [上から]：野田仁、富澤達三、渡辺美季）

編集後記

今号も、各研究班で盛んに行われている研究会の報告を中心に伝えていますが、中でも「奄美・沖縄絵引」の完成を記念した公開研究会は、昨年10月に沖縄県立博物館・美術館で開かれ、数多くの方に参加していただきました。その続編として、2015年3月21日（土）に神奈川大学で公開研究会が開かれますので、みなさまのご来場をお待ちしています。また、昨年度開催された公開研究会「戦時下大衆メディアとしての紙芝居」を出発点として、戦時下紙芝居の用語を説明するコラムも連載開始となりました。今後も研究会の報告を重ねていくとともに、写真を交えた現地調査報告を掲載していきますので、ご期待下さい。（K.K）

神奈川大学日本常民文化研究所論集31 『歴史と民俗』31

●2015年3月発行予定

〈特集〉天皇、王の葬儀

- ・「天皇、王の葬儀」を特集するにあたって（中島三千男）
 - ・日本古代の火葬—文献史料から見た（稲田奈津子）
 - ・墓制史のなかの天皇墓（岩田重則）
 - ・明治天皇大喪と植民地朝鮮（金山 浩）
 - ・王の死と葬儀の文化人類学—アフリカの事例を中心として（阿久津昌三）
- 〈第17回常民文化研究講座関連報告〉 渋谷敬三の民具研究
- ・解題 渋谷民具学の以前・以後（佐野賢治）
 - ・民具研究の萌芽—文化文政期の民具研究（小島摩文）

- ・拡張する渋谷敬三—低湿地文化論と基本民具論（大門 哲）
- ・手賀沼における「農漁村」—『増田実日記』に見る漁撈を中心として（秋山笑子）
- ・アチック・ミュージアムにおける出版と写真（羽田智幸）
- ・渋谷敬三における民具観の変遷（小林光一郎）

〈一般論考〉

- ・出世する魚—ブリの成長段階名と現代社会（安室 知）

『歴史民俗資料学研究』 20号

●2015年3月発行予定 A5版

●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容（予定）

- ・湖南省藍山県過山系ヤオ族の祭祀儀礼にみる盤王の伝承とその歌謡（廣田律子）

- ・明治初期の銀座煉瓦街における覗きからくりの検討—銀座通りは見世物町—（坂井美香）
- ・駅前商店街のまちづくりと活性化—六角橋商店街のフィールドワークを中心に—（陳競）
- ・「いたち川」川名由来についての試論—鉄の視点から—（西田英明）
- ・文献からみる表具師・経師の同化と分化（平田茉莉子）
- ・通書（暦）と折日の知識（游舒婷）

神奈川大学非文字資料研究センター 2014年度 第5回公開研究会 「『日本近世生活絵引』 奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界」

趣旨

神奈川大学非文字資料研究センターでは、日本常民文化研究所が行った『絵巻物による日本常民生活絵引』の研究から受け継いだ「日本近世生活絵引」の研究を継続的に行って参りました。2011年度から3年かけて、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編の研究・編集を進め、2014年3月にそれが出版されました。その公開研究成果報告会を、2014年10月26日に地元沖縄県立博物館・美術館で開催したところ、150名以上が参加し大成功を収めました。

さらに、神奈川大学において公開研究会を行い、絵引研究に興味のある方だけでなく、奄美・沖縄研究に携わっている、より多くの方々に本研究成果を報告し、議論したいと思います。

日 時：2015年3月21日（土）10時～17時

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 3号館405室

報告者：

富澤達三（非文字資料研究センター客員研究員）

「絵引研究について」

豊見山和行（琉球大学）

「琉球交易港図屏風からみる琉球の世界」

得能壽美（法政大学沖縄文化研究所）

「八重山蔵元絵師画稿からみる八重山の世界」

川野和昭（南方民俗文化研究所）

「琉球寫真景からみる奄美の世界」

コメンテーター：安里 進（沖縄県立博物館・美術館）

田名真之（沖縄国際大学）

真栄平房昭（琉球大学）

本村育恵（青山学院大学大学院）

コーディネーター：小熊 誠（神奈川大学） 渡辺美季（東京大学）

後援：沖縄県立博物館・美術館 浦添市美術館 石垣市教育委員会 名護博物館

※詳細は1か月前にホームページに掲載予定。※内容は変更になることがあります。



非文字資料研究センター 研究成果報告書 海外神社跡地から見た景観の持続と変容

●2014年3月20日刊行

●内容：

- ・海外神社跡地写真（撮影：稲宮康人）
- ・歴史・伝統の三度の創り替え—台湾 明延平郡王祠、開山神社を素材に—（中島三千男）
- ・台湾の神社とその跡地について（黄士娟）
- ・台湾神宮の消長と地下神殿の諸相（津田良樹）
- ・宮内神社・陸軍墓地等から見た霧社事件死没軍人の慰霊（坂井久能）
- ・北白川宮能久親王の御遺跡と神社の造営（金子展也）
- ・侵略神社跡地調査・巨文島・大田・仁川（辻子実）
- ・神社跡地の撮影を続けるにあたって——今後の撮影予定地と中国・韓国・ミクロネシアの神社跡地報告——（稲宮康人）
- ・中国福建・広東省海外神社跡地を訪ねて——汕頭神社、廈門神社、福州神社について——（渡邊奈津子）



非文字資料研究 No.33

発行日 2015年1月31日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

